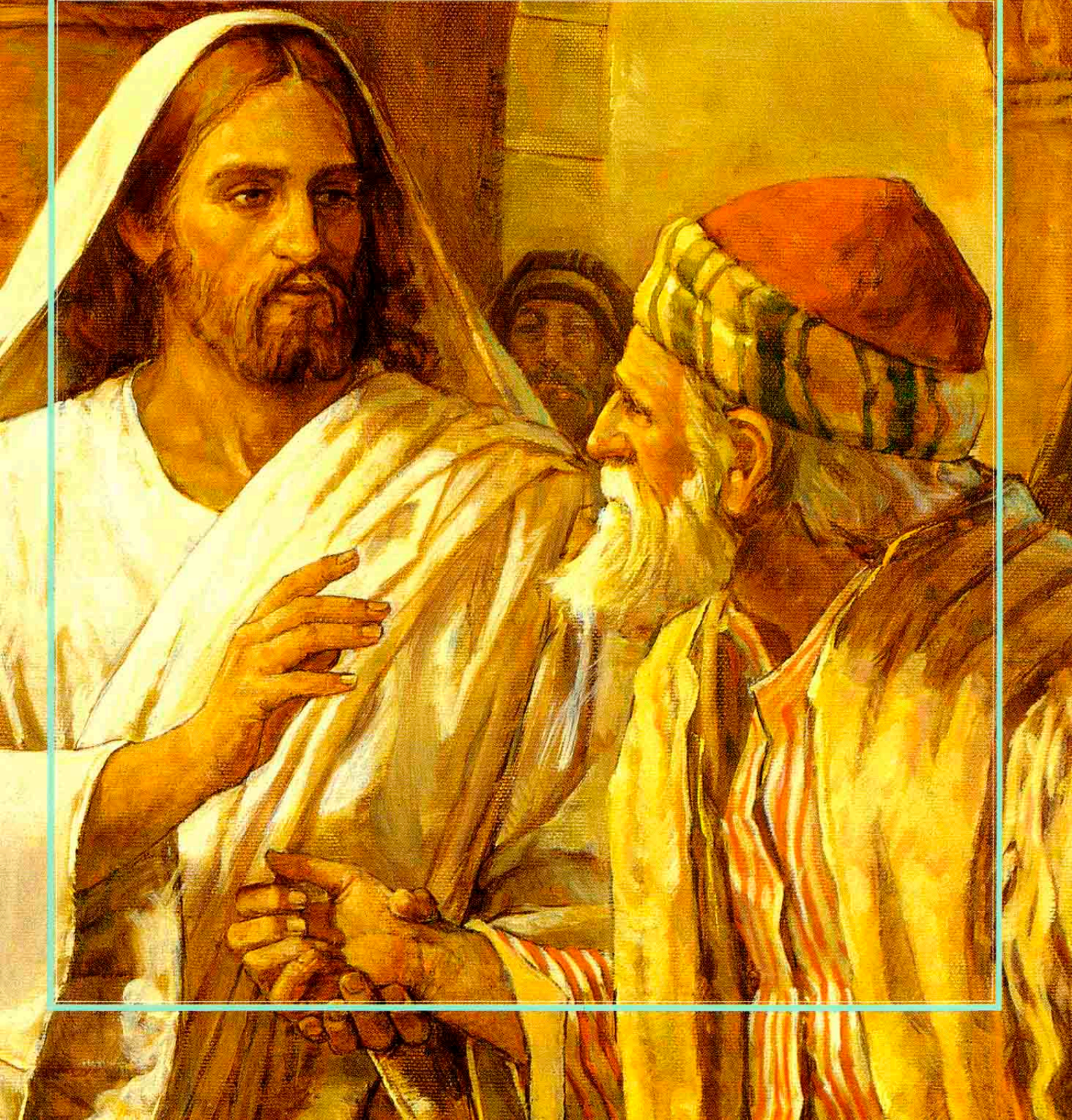


1988
11

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1988年11月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
 十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン
 顧問：ヒュー・W・ピノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、ジョージ・P・リー、キース・W・ウィルコックス
 編集長：ヒュー・W・ピノック
 教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン
 編集主幹：ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル、アン・レムリン
 制作：レジナルド・J・クリステンセン、シドニー・N・マクドナルド、ジェーン・アン・ケンブ、ティモシー・シエバード
 マーケティング・マネージャー：トーマス・L・ピーターソン

聖徒の道 1988年11月号第32巻第11号
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-440-2351
 印刷所 株式会社 精興社
 定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
 半年予約1,100円(送料共)
 普通号150円、大会号350円

International Magazines PBMA 8811JA
 Printed in Tokyo, Japan.
 Copyright © 1988 by the Corporation of the Presentation of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saint. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替（口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512）にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-440-2351（代表）●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎0427-96-2820

The Seito no Michi is published monthly by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saint. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$ 1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U. S. A. Subscription information telephone number 801-531-2947. POSTMASTER: Send address changes to "Seito no Michi" at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U. S. A.

●—もくじ

大管長会メッセージ

「わたしに従ってきなさい」

トーマス・S・モンソン

2

家庭訪問メッセージ

「愛は、すべてを耐える」

7

悔い改めの意味

セオドア・M・バートン

8

戻ること

14

信じる努力が、確信に変わる

ドン・L・サール

18

「お父さんのために祈って」

エレイン・S・マッケイ

23

賛美歌による改宗

マージョリー・P・ヒンクレイ

25

イエス様が聞いておられる

ジーン・アーンストロム

26

「高きに栄えて」

アルベルディナ・パン

・デン・ヘーゼル・ホーゲルマン 29

知恵の言葉

ダイアン・クライブ

31

貧しきことは楽しからず

マービン・J・アシュトン

33

質疑応答

ジョン・F・オドナル

36

応援団

ポール・H・ダン

40

—若人のために—

子供から大人の世界へ

デビッド・C・ルイス

38

それは私の特権です

A・リン・スコースビィ

42

私は福音を恥としない

リッキー・マクホーター

46

あなたには捧げるべきものがたくさんあります

48

各地のたより

子供のページ（別冊付録）

友だちから友だちへ

2

わかちあいのじかん

4

友だちになろう

6

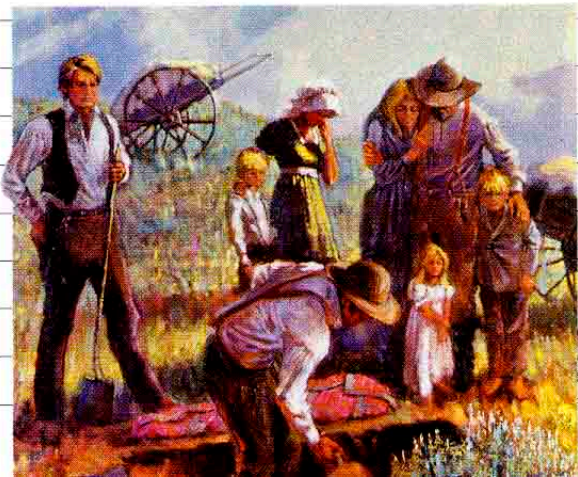
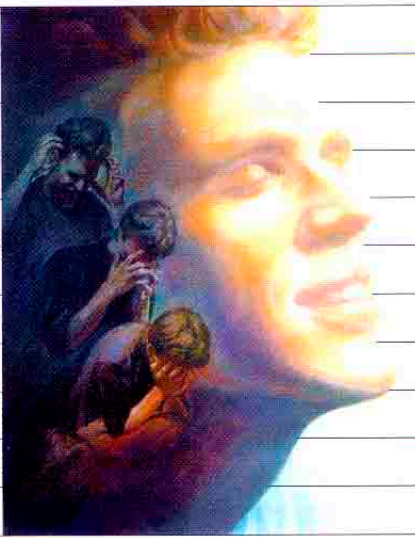
おもちゃばこ

8





表紙：片手のなえた人を癒すイエス
ロバート・T・バレット画



「わたしに 従ってきなさい」

第二副管長 トーマス・S・モンソン

グレートソルトトレイク峡谷への入口となる所に、「まさにこの地である」という文字を刻んだ、ブリガム・ヤング大管長の像が、あたかも番人が道を指し示すかのようにそびえ、その像の背後には、聖徒たちが様々な困難と戦いながら旅してきた大平原の長い道が続き、差し伸べられた腕の前方には、尊い約束の地が広がっています。

1847年に、ブリガム・ヤングによって組織され率いられた隊の旅は、歴史家たちから合衆国史上最も英雄的な行為のひとつとして評されています。しかしモルモンの開拓者の中には、病気、厳しい風雨、飢えに苦しみ、命を落とした人々が数多くいます。家畜も大きな幌馬車もなく、文字どおり手車を引きながら、大平原や山を越え、2,000キロメ



ートルに及ぶ旅をした人々もいました。彼らの内、6人にひとりには旅半ばにして倒れています。

そして彼らの中にはノーヴー、カートランド、フアーウエスト、ニューヨーク州などよりもはるかに遠くの地、イギリス、スコットランド、スカンジナビア、ドイツなどから旅をして来た人々が数多くいました。小さな子供たちには、家族や友人、楽しく安全な生活を捨ててまで、旅に出るよう両親を駆り立てる偉大な信仰を完全に理解することはできなかつたでしょう。「お母さん、どうしてここを出るの。これからどこへ行くの」と聞いた子供もいたことでしょう。それに対して親たちはこう答えたのではないのでしょうか。

「一緒に行きましょう。神の^{まち}市シオンへ。」

神を信頼して

安らかな生活があった故郷と約束の地シオンの間には、大西洋の荒波が待ち構えていました。この危険な旅の間に彼らが味わった恐怖は、はたしてどれほどのものだったのでしょうか。彼らはみたまの静かなささやきに促され、素朴ながらも堅固な信仰を支えとし、神を信頼して船出をしました。それは過去の生活を捨てて、新たな生活に向けて出発する旅でもありました。

私の曾祖父母も小さな子供たちを引き連れ、わずかな持ち物を携えて、人がひしめき合う木造船に乗り込みました。大西洋の波は高く、すし詰め船室に閉じ込められた状態で、長い航海が続きました。メアリーという病弱な女の子がいました。彼女の母親は、長い旅の疲れでどんどん弱っていく娘をいたたまれない思いで見守っていました。メアリーはやがて重い病気にかかってしまいましたが、来る日も来る日もただ揺れ続けるだけの船の中には、病院もなければ医師もいませんでした。両親は毎日毎日、海のかなたに目をやりましたが、陸の影は一向に見えてきません。結局、小さなメアリーは長くつらい船旅に耐えることができませんでした。長い間熱病に苦しんだあとに、安らかにこの世を去っていったのです。

家族や友人が大勢^{かんばん}甲板に参列し、船長の司式によって葬儀が行なわれました。帆布に丁寧^{ほんよ}に包まれたメアリーの小さな遺骸が荒れ狂う海の中に沈んでいきました。メアリーの父親は自分自身も悲しみに声を詰まらせながら、妻を慰め、何度も「主が与え、主が取られたのだ」(ヨブ1:21)と繰り返しました。しかし、私たちはいつの日かメアリーに再び会うことができるのです。

シオンの栄光

イリノイ州からソルトレーク・シティーまでの間には、石を積み上げて作られた墓が至る所に見受けられます。それは開拓者たちが払った犠牲の象徴です。彼らの肉体は安

らかに地の中に葬られています。その名はいつまでも私たちの心の中から消えることはありません。

疲れきった牛たちの歩みは遅く、車輪はきしみ、勇敢な男たちでさえも苦しみあえぐ旅でした。しかし、信仰に鼓舞され、強靱^{きょうじん}な精神力を持つ私たちの先祖は歩み続けました。彼らは、昼は雲、夜は火の柱によって導かれていました。

そして開拓者たちはよくこの歌を歌ったのです。

恐れず来れ聖徒	進み行けよ
その旅はつらくとも	恵みあらん
無益な憂いは	払いて努めよ
されば喜ばん	すべては善し

(『恐れず来れ聖徒』讚美歌23番)

この開拓者たちは、主の次のみ言葉をしっかりと心に留めていました。「わが民は、すべてのことに試煉を受けざるべからず。かくして彼らはわが与えんとして持てる光栄、すなわちシオンの光栄を受くるために準備せらる。」(教義と聖約136:31)

長く苦しい旅の終わりが近づいてくると、一人一人の心の中に喜びが満ち、疲れきった体にも新たな力がわいてくるようになりました。

ある開拓者が残した古びた日記の中にはこう書かれています。「私たちは^{こゝろ}頭を垂れ、心からの感謝の念を持って、全能の神に謙遜に祈り、この地を神の民が住む地としてみ前に捧げた。」

別の開拓者は次のような言葉を残しています。「私たちが山の中腹を掘って作った一部屋だけの家には、窓のようなものは何ひとつなく、ドアもなかった。それで母が出入口の所に古びた毛布を一枚つるした。それが最初の冬の間、わが家のドアとなった。母は、たとえ豪華な宮殿を持つ女王でも、この横穴式の家ができたときに自分が感じた誇らしい気持ちや、主のみ守りと祝福への喜びにまさる思いを感じることはできないだろうと話していた。」

開拓者たちは様々な試し、苦しみ、悲しみを確固たる勇氣と不動の信仰によって乗り越えていきました。開拓者たちを予言者として導いたブリガム・ヤングは、彼らが交わっていた誓約について次のように言っています。「^し而して、われらの誓約はかくの如し。すなわちわれら、ことごとく主の法令を履み行ふべし、と。」(教義と聖約136:4)

現代に生きる私たちの試練

時の流れとともに、人々は開拓者を忘れ、粗末な墓に愛する者を葬って涙と苦しみの道を歩み続けた彼らへの感謝の気持ちを失ってしまっています。現代の私たちにはどのような試練があるのでしょうか。歩みを困難にするごつごつ



とした道や山はないのでしょうか。切り開かなければならない道はないのでしょうか。苦勞して渡らなければならぬ川はないのでしょうか。現代社会を脅かす様々な危険から、私たちが安全な道へ導く開拓者精神は本当に必要とされていないのでしょうか。

道德の標準は低下の一途をたどっています。犯罪を犯して刑務所や感化院に送られたり、法の制裁を受ける人々の数も増えています。重罪から軽い罪まで、その種類を問わず、犯罪が増加しています。礼儀を重んじる気風も急速に衰えているように思われます。永遠の喜びを犠牲にして、

束の間の喜びを追い求めている人々も多くいます。宇宙を征服しても自分自身を治めることができないでいるのです。このようにして人々は心の平安を失っているのです。

私たちは、昔の開拓者たちのような勇気と強い意志を身につけることができないのでしょうか。現代の開拓者になることはできないのでしょうか。ある辞書には、開拓者の定義として、次のようなことが書かれていました。「先に進み、他の人々に進むべき道を示す人」今こそ開拓者が必要とされている時代です。

一時は隆盛を誇ったギリシャ人やローマ人も、他の人々



の権利を尊重せずに、いわゆる「自由」を追い求めるようになる、衰退の道をたどり始めました。彼らは努力をせずに安楽な生活を望み、自分の責任を果たさずに安全を手にしようとしたのです。しかし最後には、自由も、安楽な生活も、安全もすべて失ってしまいました。人々が利己的な目標の追求に汲々としている現代にも同じようなパターンが見受けられます。一方、「だれの話に耳を傾けたらよいのか」「だれに従ったらよいのか」「だれに仕えたらよいのか」と、生活の指針を求めて、あちらこちらとさまよっている人々もいます。そしてサタンは私たちに偽りの指導者を与え、狡猾な方法で義と善の道から引き離そうと、常に待ち構えているのです。

真理に固くつく

しかし、真剣に耳を傾ける人なら、「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14:6)と言われた救い主のみ言葉を心に留めることでしょう。誘惑に負けず、真理に固くつくには、主のみ言葉に耳を傾けなければなりません。忘れないでください、一時的な興奮や罪悪の中に喜びを追い求めようとしても、決して心の飢えを満たすことはできないのです。罪悪から徳が生まれることはなく、愛が憎しみによって強められることもありません。また、臆病な気持ちの中から勇気が生まれることもありませんし、疑いの中から信仰が生まれることもありません。そして、争いは、主とはまったく無縁のものなのです。

純潔、正直、神のみ言葉への従順などの徳について、愚かな人々からあざけりや侮辱を受け、それに耐えるのが非常にむずかしいと感じている人々もいます。しかし、その一方では、信仰をしっかりと守り、時の流れの中でもいつまでも色あせない模範を示してくれた義人たちの生涯の中に、力を見いだしている人々もいます。ノアが箱船を造るように命じられたときに、愚かな人々は雲ひとつない天を仰いで、ノアをあざけり、はずかしめました。そして彼らはそのようなことを、雨が降り始めるまで続けたのです。

何世紀も前のアメリカ大陸にも、救い主の存在とその使命を信じようとしないう人々がいました。彼らは、救い主が十字架につけられたときの天変地異によってゼラヘムラが炎に焼き尽くされ、地が震い、モロナイハ市が地の中のみ込まれ、モロナイ市が水中に没するまで、言い逆らい、不従順な生活を続けました。それまで義人をあざけり、はずかしめ、神を冒瀆し、罪深い生活を続けていた人々は、重苦しい闇と恐ろしい沈黙の中で滅ぼされていきました。そして、神のみ言葉が成就されたのです。

私たち人間は、何度もこのような大きな代償を払わなければ、教訓を得ることができないほど愚かなのでしょうか。時は流れ過ぎていきます。しかし、真理は不変です。もし過去の歴史から教訓を得なければ、私たちは必ずや同じ過

ちを犯し、昔の人々と同じ苦しみ、悲しみを味わうことになるでしょう。私たち人間には、最初から終わりまでのすべてを見通し、救いの計画を定めてくださった主に従う知恵がないのでしょうか。

人々は、文字どおり進むべき道を示してくださった平和の君に従うことができないのでしょうか。主の計画は私たちを、罪悪と自己満足と過ちのバビロンから救ってくれるのです。主の模範は私たちに道を示しています。主は誘惑に遭われたときも、この世の栄華を与えようと言われたときも、それらを一蹴なさいました。

われに「来よ」という 救い主にゆかん
一人では居られず み子よ、共にあれ

永遠に主の言葉 従いてゆけば
みくへの栄えも すべて恵みうけん
(『われに「来よ」と』讃美歌77番)

新年を間近に控えたこの時期にあたり、救い主イエス・キリストに愛の精神を持って従順に仕え、人々のために義の道を切り開く決心をしようではありませんか。□

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 開拓者たちは様々な試し、苦しみ、悲しみを確固たる勇氣と不動の信仰によって乗り越えていった。
2. モンソン副管長の問いかけ——「現代社会を脅かす様々な危険から、私たちを安全な道へ導く開拓者精神は本当に必要とされていないのでしょうか。」
3. 永遠の喜びを犠牲にして、東の間の喜びを追い求めている人々が数多くいる。
4. もし過去の歴史から教訓を得なければ、私たちは必ずや同じ過ちを犯し、昔の人々と同じ苦しみ、悲しみを味わうようになる。

話し合いを進めるために

1. 人々をキリストのみもとに導くには、模範によって正しい生き方を示さなければならない。どうしたらその模範を示すことができるだろうか。
2. このメッセージの中に、家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や話はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておいた方がよいだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。

「愛は、すべてを耐える」

(Iコリント13:7)

目的：人生の様々な苦しみの中にあっても、思いやり、謙遜さ、勇気、信仰などをさらに強めていく。

アンダーセン姉妹が心から主に頼るようになったのは、幼い娘が、それまで友人として交際していた男性から性的な虐待を受けるといふ忌まわしい出来事があった後のことでした。長々と続いたその裁判では娘自身が証言させられ、家族もかなりの苦痛を強いられました。

事件は裁判によって公にされ、アンダーセン姉妹の家族は不快な思いを鬱積させていきました。彼女はそのときの自分の気持ちについて次のように述べています。「家の中のいつもの仕事や教会の責任を果たすのがとてもつらくなり、考えが混乱したり、気持ちが落ち込むようなことが何度もありました。」

しかし、主は彼女の家族がこの困難な時期を乗り越えられるように、友達というすばらしい祝福を与えられました。そして主はもうひとつの方法で彼女に祝福を与えられたのです。生まれて間もない彼女の子供が夜中に目を覚ますようになったのです。それはほかの子供たちのときにはまったく経験しなかったことでした。その理由はあとになってわかりました。彼女はこう言っています。「みたまのささやきによって知ったのですが、主は私が毎晩毎晩目を覚ましたまま、悩み苦しんでいることのないように、子供の目を覚ましてくださったのです。子供が起きているので夜中でもすることがあり、悲しんでばかりいるわけにもいきませんでした。」

彼女とまったく同じでないにせよ、私たちはこの世に生きている限り、苦しみや悲しみを経験します。ベンソン大管長は次のように話しています。「主が予告されているように、私たちは現在人々が肉にあっても、また霊にあっても恐れおののいている時代に生きています。またサタンは聖徒たちを失望と落胆の淵に沈め、暗い陰うつな気持ちにさせて滅ぼそうと、前にも増して躍起になっているのです。」

(『落胆してはならない』「聖徒の道」1987年3月号、P.2)
試練に負けてはいけません。私たちは試練を通して謙遜さ、信仰、勇気、思いやりなどについて学び、さらにキリストに似た者とさえなることができます。試練を通して、私たちは慈愛すなわちキリストの純粋な愛を、さらに強めていくことができます。そして、このキリストの純粋な愛は、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」のです。(Iコリント13:7、モロナイ7:45参照)

試練のときに人々に純粋な愛を示し、主を信頼するのは決して簡単なことではありません。そのようなときにはベンソン大管長の次の言葉を思い出してください。「主のようになろうという目標を心に抱いてください。そうすれば、主を知り、主のみこころを行ないたいと心から求めることによって、沈んだ気持ちを払い去ることができます。」(『落胆してはならない』P.7)

苦しみ、失意、悲しみ、迫害にあっても、それに耐え、主を信頼するには、強い信仰が必要です。アルマの次の言葉は、忍耐について、私たちに多くのことを教えてくれています。「お前が神にたよればたよるだけ、それだけ多くお前は自分の身に受ける試練と苦しみと悩みから救われ、終りの日になって高くあげられる。」(アルマ38:5) □

訪問教師への提案

1. 人は悲しみを通してさらに謙遜になり、キリストに似た者となることができます。そのことについて話し合う。
2. 試練を通して成長した経験があれば、それについて話し合う。
(「家庭の夕べアイデア集」 pp. 138, 143, 173-74参照)



悔い改めの意味

七十人第一定員会会員 セオドア・M・バートン

福音の中で最も基本的な原則というのは、往々にしてあまり理解されていないものです。中でも特に基本的なもののひとつに悔い改めの原則があります。

悔い改めは、個人の進歩と成長に欠かすことができません。これは福音の中でも特に基本的な原則であるため、主は聖典の中でこの原則をたびたび強調しておられます。たとえば、初期の聖徒に与えられた伝道の召しについて述べられている教義と聖約の聖句の中で、主はこのことに関し繰り返し勧告を与えておられます。

「さて見よ、われ今汝に告ぐ、すなわち汝にとりて最も価値あることは、汝今の代の人々に悔い改めを宣べて人々をわれに導き、以て彼らと共に父の御国に休まんことなり。」
(教義と聖約15：6，16：6)

これは当時の人々だけに当てはまるものではなく、私たちに對するものでもあるのです。この啓示は、他の人々に悔い改めを述べ、それをみずから実行することこそ最も価値あることであることを私たちに思い起こさせてくれます。

御父のみもとに帰る

では悔い改めとは何でしょうか。ここでは悔い改めとは何かを論ずる前に、別のものについて考えてみた方がわかりやすいかも知れません。

教会幹部として私は、大管長会が悔い改めをした違背者の教会への再加入と、神権と神殿の祝福の回復を考慮する際に参考にする資料を作成する責任を受けてきました。多くの場合、監督はこのように書いてきます。「彼は十分に苦しんだと思います。」しかし苦しむことは悔い改めではありません。苦痛は完全に悔い改めをしていないことから生じてくるものです。またステーキ部長はこう書いてきます。「彼は十分に罰を受けたと思います。」しかし罰も悔い改めではないのです。罰は不従順が招く結果であり、悔い改めに先行するものです。また夫はこう書いてきます。「私の妻はすべてを告白しました。」しかし告白は悔い改めではありません。告白は、悔い改めをしようとするときに起きてくる罪の意識です。妻はこう書いてきます。「夫は深く後悔しています。」しかし後悔も悔い改めではないのです。後悔や悲しみの気持ちは、その人が完全に悔い改めをしていないために味わう感情です。苦痛や罰、告白や後悔の念がまた悲しみが、悔い改めを伴うことは確かです。しかしそれ自体が悔い改めではないのです。では悔い改めとは何なのでしょうか。

この問いに対する答えを見つけるには、まず旧約聖書をひもとかなければなりません。旧約聖書はもともとヘブル語で書かれたものであり、悔い改めの概念を表す言葉としては「shub」という言葉が使われています。「shub」とは「to turn from」(……から立ち帰る)という意味です。

旧約聖書が私たちに語りかけているのは、「shub」すなわち教えに背くことをやめ、愛ある天の御父に立ち帰ること、

言い変えるなら不幸や悲しみ、後悔、絶望をあとにして御父の家に帰るようにということです。そこでは、私たちは幸福と喜びを見いだし、神の他の子供たちに受け入れてもらえるのです。

真心から悔い改めをし、罪を捨てるならそこに喜びをもって迎え入れられることを私たちに知らせるために、多くの予言者が「shub」のことについて書き記しています。旧約聖書は、私たちが悪から遠ざかり、価値ある良いことを行わなければならないことをくり返し教えています。これは、私たちが単に生き方を変えるだけでなく、私たちの行動を支配する思いを変える必要があることを示唆しています。

「shub」という考え方は、ギリシャ語の新約聖書にも見られます。ギリシャ語では、「metanoeo」という言葉を使って悔い改めの意味を表わしています。「metanoeo」とは心や思いの変化を意味し、熟慮の末、生き方までも変わってしまうという意味です。ギリシャ語の「metanoeo」とヘブル語の「shub」は、どちらも完全に悪から遠ざかり、神と義に近づくという意味です。ところが、新約聖書がギリシャ語からラテン語に翻訳される過程で問題が生じてしまいました。不適当な訳が為されてしまったのです。ギリシャ語の「metanoeo」がラテン語の「poenitere」という言葉に訳されているのです。これには罰する、償いを課する、贖罪、悔い改めなどの意味があります。このようにヘブル語とギリシャ語の美しい意味が、ラテン語の傷つける、罰する、むち打つ、切り離す、不具にする、損じる、飢えさせる、苦しめるといった広範囲な意味に変わっていったのです。人々が、繰り返し与えられる罰または終わりのない罰という意味に捕らえている、この悔い改めという言葉を、恐れるようになっていったのも無理からぬことです。

**悔い改めとは人が罰せられることを言うのでは
ありません。そうではなく、私たちが永劫
の罰から逃れ、喜びをもって安息に入るため
に、神の助けが受けられるようみずから生活
を変えることを言うのです。**

永劫の罰から逃れる

悔い改めとは人が罰せられることを言うのでは
ありません。そうではなく、私たちが永劫の罰から逃れ、喜びを
もって安息に入るために、神の助けが受けられるようみず
から生活を変えることを言うのです。このことをはっきり
理解すれば、悔い改めは私たちの心に不安や恐怖を与える
ものではなく、貴い歓迎すべき言葉となるはずです。

エゼキエル書の33章から、私たちは悔い改めについても
う少し詳しい知識を得ることができます。そこにはこう記
されています。「その悪人が質物を返し、奪った物をもど
し、命の定めに進み、悪を行わないならば、彼は必ず生き
る。決して死なない。」(15節)

ではここに述べられている悔い改めの3つの段階につい
て考えてみましょう。まず最初は、「質物」を返す決意をす
ることです。これは悔い改めの過程でも最もむずかしい段
階です。では「質物」を返すとはどういうことでしょうか。

「質物を返す」すなわち「質物」を新たにすることは、主
との契約を新たにするという意味です。私たちはあらゆる
口実を捨て、自分のしたことを素直に完全に認めなければ
なりません。「私があんなに怒っていなかったら……」

「両親がもう少し厳しくしてくれていたら……」「監督がも
う少し理解を示してくれていたら……」「教師がもう少しよ
く教えてくれてさえいたら……」こういったことを口にす
べきではありません。口実はいくらでも出てきます。しか
しどんな口実も結局は何の役にも立たないのです。

自分自身の力で完璧な決意をする

真心から悔い改めをするには、まずそのような言い訳を
すべて捨て去ることで、そして神のみ前にひざまずき、

自分のしたことが悪いことであると心から素直に認めるの
です。こうして私たちは、天父に心を開き、心からの決意
をします。

神に対して心からの決意をし、真剣に生活を変えようと
努力することは悔い改めの始まりです。救い主の御父に対
する偉大な決意は、精神的な苦痛のあまり、血が汗のした
たりのように地に落ちた、ゲツセマネの園でのあの恐ろし
いまでの試練によく現われています。この園での経験をし
る前に、イエスは天父と親しく話しておられました。しか
しここでひとりイエスは、世の罪を一手に引き受けること
になったのです。それはあたかも頭上の天が閉ざされ、神
がイエスの声を聞かれなくなったかのようでした。

イエスは身に受けた重荷のために大いに苦しまれ、苦悩
のうちに祈りを捧げながら、杯を過ぎ去らせほかに道が開
けるようにと願われたのでした。同時にイエスが「みこ
ろが行なわれるように」と祈られたのも事実です。しかし、
その願いも空しく、答えは得られず、イエスの苦しみは続
きました。

イエスはこの苦しみから逃れられるようにと3度も嘆願
されました。しかし3度とも答えは得られませんでした。
(マタイ26:36-44参照)

しかしキリストは、命じられたことは必ず為すという強
い決意を固めておられました。そしてご自身から進んで歩
まれたのです。その苦しみはたとえようもないほどに大き
なものでしたが、イエスはいかなる犠牲を払おうとも、す
べてに従順であることを決心しておられたのです。

律法を明らかにする

悔い改めようという努力には心身ともに苦痛が伴います。
しかし天父のみこころを行なうという強い決意は、悔い改

神の息子、娘として、私たちは悔い改めの真の意味を理解し、悔い改めという言葉が麗しいものであり、すばらしい平安の源であることを悟らなければなりません。

めを可能にし、苦痛にも耐えさせてくれます。悔い改めをするときに忘れてならないのは、主は私たちの罪を罰することはなさらないということです。主は私たちにくださるはずの祝福を留められるだけなのです。私たちは自分で自分を罰するのです。聖典には、悪は悪によって罰せられることが再三再四述べられています。ではそれがどのように行なわれるのか実際に例をあげて見てみましょう。

母親が私に、やけどをするので熱いストーブに手を触れないよう注意したとします。つまり彼女は私にひとつの律法を伝えたわけです。私がそれを忘れてまたは故意に、その熱いストーブを触ったとします。結果は当然やけどを負うでしょうし、やけどを負ったことに泣きながら文句を言うでしょう。しかしやけどを負ったのはだれのせいでしょうか。母親のせいではありませんし、もちろんストーブのせいでもありません。自分が原因なのです。つまり自分で自分に罰を加えていることになるのです。

しかしこの例には、慈悲という重要な要素が欠けています。ここで慈悲について、悔い改めの第二段階である償い、すなわち「奪った物をもど(す)」(エゼキエル33:15)こととともに話したいと思います。もし皆さんが金品を盗んでしまったら、たとえ金額が大きい場合でもいずれば返すことができます。しかし徳を失ってしまったらどうでしょうか。もと通りにするために何ができるでしょうか。たとえ命を犠牲にしたとしても、徳を取り戻すことはできないでしょう。それでは、善行を積むことによって償いをしていく努力は無駄だということでしょうか。それとも皆さんの犯した罪は赦されないということでしょうか。いいえ、そうではありません。

イエス・キリストは皆さんの罪を償い、義にこたえられ

たのです。それ故、キリストは悔い改めをする人に慈悲の手を差し伸べてくださるのです。皆さんが生活態度を改め、真心から悔い改めをしていけば、慈悲のうちにキリストを通して皆さんの罪は赦されるのです。当然罪が重ければ重いほど、悔い改めに払う努力は大きくなります。しかし日々、完全に主に心に向けていくようにすれば、私たちは救い主の前に咎なくして立つことができるのです。大切なのは、傷口が再び開くことがないように、主に完全に癒してもらうことです。体の傷が癒えるのに時間がかかるように、心の傷も癒えるには時間が必要なのです。たとえばけがをした場合、傷は徐々に良くなってきます。しかし傷が治る途中でかゆみが起こってきます。そのときに掻いてしまったら、再び傷口が開き、治るのにまた時間がかかってしまいます。また傷を掻くことによって、指先についたばい菌が侵入するという大きな危険もあります。傷を一層大きくし、体の一部を、ひいては命までも失うことになりかねません。

肉体に負った傷には適切な治療を施さなければなりません。傷が大きい場合はそれなりの手当を受けるために医者に診てもらわなければなりません。心の傷についても同じことが言えます。むなしい後悔の気持ちでただ「傷口を掻く」のではなく、傷を治してもらわなければなりません。犯した罪が告白を必要とするものであれば、監督のもとへ行き、霊的援助を受けてください。監督に傷口を消毒してもらうのです。その傷口が再び合わさるときに痛みが生じるかもしれません。しかし傷はそうして徐々に癒されていくのです。

前向きな正しい思い

悔い改めの過程を踏むにあたって欠かせないのが忍耐です。再び幸福を得、実りある日々を送れるよう、思いや行ないを前向きな正しいものとしてください。

自分の犯した罪や悪事にばかり心を向けていて自分を赦すことをしないと、私たちは再び罪を犯すようになります。しかし私たちが自分の問題や罪から離れ、思いにおいても行ないにおいてもそれらを遠ざけていけば、前向きな良い事柄に集中できるようになります。このように良い目的に向かって努力していると、罪は私たちにとってそれほど大きな誘惑ではなくなってきます。

では悔い改めの3番目の段階である罪を捨てること、すなわち「命の定めに進み、悪を行わない」(エゼキエル33:15) ことについて考えてみましょう。私たちはひとつずつ罪を捨てていくようにしなければなりません。主は次のように約束してくださっています。「彼の犯したすべての罪は彼に対して覚えられない。彼は公道と正義とを行なったのであるから、必ず生きる。」(エゼキエル33:16)

近代になって、主は予言者ジョセフ・スミスにこのように言われました。「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。」(教義と聖約58:42)

では人が罪を悔い改めたことほどのようにしてわかるのでしょうか。主は次の聖句の中でこの問いに答えておられます。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし」(教義と聖約58:43)

当然のことながら、重大な罪の場合の悔い改めに先立つ告白は、告白を聞く権能を持った監督かステーク部長に対

して為されるべきです。また赦しは、悪事によって傷ついた人々に対して求めるべきです。しかし、罪に対する公の告白や公に赦しを求めることは、犯した罪が公のものであることがはっきりするまで待つべきです。重大な罪を悔い改めるには時間と努力が必要です。犯した罪の大小にかかわらず、悔い改めの最後のステップである罪を捨てて天父に立ち帰るということは、とりもなおさず罪を再び繰り返さないということです。私たちに、欠点や過ちや罪を克服できるよう助けてくださる、賢明でやさしい救い主が与えられていることは、何とすばらしいことでしょうか。救い主は、私たちを愛し理解してくださっています。また私たちが誘惑に出会うこともご存じで、同情を寄せてくださっています。

モルモン経の中のベンジャミン王は、私たちの罪に対して示してくださる主の大いなる慈悲と犠牲に対して、私たちが感謝を示すことのできる方法を教えています。「ごらん、私がこれらのことを言うのはお前たちに知識を与えるためであって、またお前たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのであることを悟らせるためである」(モーサヤ2:17) 神のみ業と栄光とは、ご自身の子供たちを贖うことあがなです。私たちが他の人々を贖う業に就くならば、多少なりとも主から受ける祝福に報いることができるでしょう。

神は慈しみ深いお方です。したがって私たちに悔い改めをし、不従順からくる苦しみや悲しみ、絶望の束縛から逃れる方法を備えてくださいました。神の息子、娘として、私たちは悔い改めの真の意味を理解し、悔い改めという言葉が麗しいうつくものであり、すばらしい平安の源であることを悟らなければなりません。□

戻ること

匿名希望

私が教会から破門されたことを 父親に知らせたのは、折り悪し くも父親の誕生日でした。

それほど前のことではありませんが、神権と神権による儀式についてのレッスンを準備していて、私はそのレッスンをこれまで幾度となく聞いてきたことに気づきました。そこで、定員会のメンバーの助けになることは何かないかと考えた私は、神権を失うということがどういふことなのか、またそれを取り戻すための苦労がいかなるものかを彼らに伝えることにしたのです。

私は彼らに、「何事も自分で試してみても、貴重な経験をするという考えがどんなに間違っているかをわかってほしい」と思いました。私が払うことになった恐ろしいまでの代価を払わなくて済む方がどんなにすばらしいかを彼らにわかってもらえたらと思ったのです。年若い私は、破門されることが火を見るよりも明らかな重大な罪を犯してしまいました。そうなるってわかっていたのです。しかし私は「真実の愛」の前には、いかなる代価も払い切れないことはないことを確信していました。この愛は、結果的には自分を正当化してくれるはずだと信じていたのです。

その後、私は神権指導者の所へ行き、自分の心と思いに重くのしかかっていた重大な秘密を告げることになりました。思っていた通り、この愛ある指導者はすぐに、私を教会から破門するために必要な手続きを取り始めました。なすべきことを悟った彼は、理解あるやさしい思いで、また大きな愛と慈悲の心でそうしたのです。

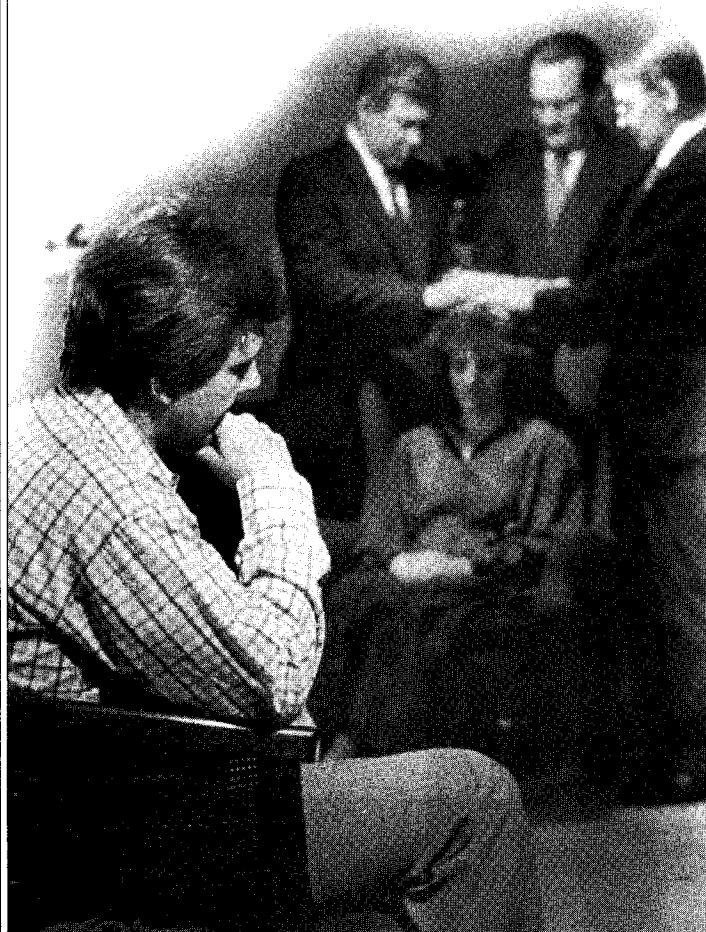
破門の苦しみが現実となって私に押し寄せてきたのは、そのことを伝えに両親のいる家に戻ったときでした。私はどう伝えたらよいか適切な言葉を探し始めました。よりによって父の誕生日に、私がプレゼントすることになったのは、父が生涯をかけて愛し、忠実に仕えてきた教会から息子が破門されたという知らせでした。

その後の数カ月間は、私にとって時が止まってしまったかのようなものでした。まるで悪夢を見ているようでした。だれひとり私の立場を理解してくれる人もいなければ助けの手を差し伸べ、理解を示してくれる団体も組織も見当たりませんでした。私の人生はまったく意味を失ってしまったのです。私は気が抜けたようになり、帆も舵も錨もない船のようにただ漂っていました。以前持っていた目標さえも失った私の心は死んだも同然でした。こうして、しばらく家で過ごした私は、その後子供のころに好意を抱いていた女性と出会いデートを始めました。そして数カ月後に私たちは結婚しました。しかもそれは、最悪の交際期間を経ての結婚でした。私には神権もなく、神殿結婚もできなかったのです。私たちの結婚は市民結婚となりました。このように最初から、私たちの関係は不安定なものだったのです。

教会に行くことは、自分なりに決意していた悔い改めに欠かせない大切なステップであることは承知していましたが、それは私にとって、どうしようもないほどの苦痛となっていました。私は何度も何度も自分の置かれている状況に思いを馳せました。また、見知らぬ人から、祈りの責任の依頼が来たり、レッスンの中の疑問点に対する解答を求められたりしたことも幾度となくありました。そんな依頼に対しても私に許されているのは、ただ「すみませんができません」という返答だけでした。このようにしていろいろな面で私は自分の犯した罪の重大さを思い知らされたのです。

こうした状況がつかつたのは言うまでもありませんが、私はひとつのことを除けば自分なりにすべての状況になんとか耐えることができたと思っています。そのひとつのこととは聖餐会のことです。毎週聖餐が祝福され配られるたびに、私は心の中で悲しみに泣き、祈りました。しかし、私は自分の罪のためにまた破門された身であるために、聖餐にあずかって聖なるバプテスマの誓約を新たにすることができなかったのです。私は自分でその誓約を破ってしまったのです。私は主とひとつになることを、山ほどに大きな罪から解放されることをどんなに願ったことでしょうか。

それまでの何年間か、私はサタンとその弟子たちの力に酔いしれていました。しかし今、私は神権を正しく行使する際に授かる神聖な力をこのうえなくはっきりと知ったの



です。私はもはやそうした悪の力を避けるための神聖な力を行使することができないのです。その後の数カ月間、私は父に頼んで自分と自分の家を何回も祝福してもらい、暗黒を追い払ってもらいました。その後、妻は私たちにとって最初の子である男の子を出産しました。これは私たちにとって大きな転機となりました。自分で祝福の言葉を述べることも、その特別な儀式に加わることもできず、ただじっと見守る自分がなとなさげなく寂しく思えたことでしょう。私は、息子が生まれたことで経済的負担が大きくなったことに腹だたしささえ感じる有様でした。私は自分の人生に耐えきれない程の試練を与える神を^{とが}咎め始め、邪険になっていきました。そうして教会と福音の光から完全に去っていったのです。

その後の数年間は実に惨めなものでした。子供たちが何人か生まれ、そのたびに彼らは祖父に祝福されるという状況が続きました。そのことで胸が痛くなるのを避けるためか、私の心は次第に鈍くなり何も感じなくなっていきました。そして再び教会員になるという意欲も消えかかっていました。というより自分にそう言い聞かせたのかもしれませんが。私は次第に、より罪深い人間になっていきました。そしてその都度、実際に主に対し、また家族に対し大声でこう叫んだのです。「ほら、ぼくには教会なんて必要ないのさ。」しかし、声を大きくして叫べば叫ぶほど、私には自分が間違っていることがわかっていったのです。私は、自分が正当化され、罪悪感がなくなることを願って自分の不名誉と家族に負わせた傷を公然と誇らしげに語りました。こうした経験を通して、私は本当のことを知りました。私がそれほど頑固に反発し続けたのはそのためかもしれません。すなわち自分が罪悪感を感じれば感じるほど、一層罪深い行ないに没頭していったのです。私は世の人々に、自分の人生には自分が責任を持てばよいということを示し続けました。私はもはやだれをも必要としなくなっていったのです。

結局、精神的な不一致に完全にまいてしまった妻は、選ぶ術もなく私のもとを去って行きました。それはまた私を喜ばせることにもなりました。ついに自由を手にしたのです。しかしその後の2週間は、私の生涯で最も寂しい孤独な日々となりました。真の友もいなければ両親の家に

てさえ慰めが得られないのです。

しかしやっとのことで、私は自分にとってほかの何よりも家族が大切であるということがわかったのです。そして妻にもなんとか戻ってほしいという気持ちが強くなっていきました。問題はまだまだたくさん残っていましたが、私たちは再び一緒になることに同意しました。私は悪い仲間や環境から遠ざかるようにしていきました。しかし、教会に戻りたいという気持ちはすぐには出てきませんでした。

私たちに娘が生まれたとき、私は自分なりに一大決心をする必要性を感じました。成人していない3人の子供を抱えて、私はその日暮らしの生活はしてられないことを悟ったのです。はっきりと歩むべき道を見定め、それに従って生きていかなければいけないのです。何カ月間か、私の心の中で葛藤かつとうがありました。義を選びたいという気持ちと同時に、私には、その選びが何らかの利己的な動機によるものではないという確信がほしかったのです。私は、妻や子供たち、両親を喜ばせるためだけに戻りたくはなかったのです。みんなにとっての真の幸福は、私自身が実際に証をとり戻してこそもたらされることを私はよく承知していました。

多くの祈りと勉強と葛藤のあとで、私は心の中に、かつての霊的経験の思い出を引き出してくれる小さなひらめきを感じ始めたのです。そしてそのひらめきは次第に大きくなっていきました。そしてついには、たとえ破門された身でも主は今なお私を愛してくださっていることを感じる事ができたのです。希望が見え始めました。私は再び前進し始めた気分でした。

しかし正しい道に戻っても、事態は何ら好転しませんでした。事実しばらくの間は、熱心に努力すればするほど事態は悪化していったのです。私は大きな試練と苦難に襲われ悩みました。主の祝福が近づくにつれ、私の生活は再び崩れ始め、再度絶望感にさいなまれ始めたのです。

しかし私は負けずにがんばり続けました。その結果、天父は約束通り私に祝福を注いでくださり、自分自身の大変な努力と友人や教会の指導者からの大きな助けや支持を受けて、再びバプテスマの水をくぐることができたのです。何と嬉しかったことでしょう。しかしそれで試しが終わったわけではありません。その後1年半の間、私は神権を受

けるために熱心に努力を続けました。そして完全にもと通りになることを願っていた私の思いはかなえられました。再び教会員になれたことも大きな喜びです。私はみんなの仲間入りを心から願っていたのです。そしてそれは、家族を連れて会いに来るようにという教会幹部からの呼びだしを受けたことによって実現しました。大きな期待と不安と喜びを胸に、私は家族と共にあの思い出深い会合へと車を走らせました。子供たちは主の使徒に会えることを知って興奮気味でした。私は、妻のおなかにいる子供を祝福してやれるという思いで感激に浸っていました。


愛にあふれた面接のあとで、この神の使いであるやさしい幹部は私の妻を呼び寄せると、自分の手を私の頭におきに押し、私を元の状態に戻してくれたのです。すなわち「神権のあらゆる権利権能を以前の私に戻して」くれたのです。私は妻と共に泣きました。

それからこの使徒は私の妻の方を向き、祝福をしてほしいかどうかを訪ねました。妻がそれを願うと、彼は私の方を向き、神権が回復されたかどうかを知る唯一の方法は、それを行使してみることでであると話し、妻に私から祝福を授けるように勧めたのです。もちろん彼は私のそばについてくれました。その後の数分間に私は、神権について様々な書物を通して今まで学んできたこと以上のことを学ぶことができたのです。しかし戦いは終わったわけではありません。その日以来、私にとってかつてなかったようなむずかしい問題が持ち上がってきています。そして、今後もそれ以上にたくさんの難問に出会うことでしょう。しかし今は聖霊に導きを願うことができるのです。

私は2番目の娘を祝福することができましたし、ほかにもいろいろなことで神権を行使してきました。そして今私と妻は、生涯で最も重要な日、すなわち白い衣に身を包んだ子供たちを神殿の聖なる部屋に連れて行き、この世から永遠にわたって結び固められる日に向かって準備をしているのです。

私が最も後悔しているのは、何年か前にこの祝福を拒んでしまったことです。これを取り返すために払った代価は、実に大きなものでした。私は再び元に戻ることができて心から感謝しています。しかし、あのように道を踏み外すことがなかったらどんなによかったことでしょう。□



A black and white illustration. In the foreground, a man with a full, dark beard and long hair is shown from the chest up, looking slightly to the right. He is wearing a light-colored, button-down shirt. Behind him, a woman with short, dark hair is looking towards the right. In the background, two men in dark suits and ties are walking away from the viewer. The overall style is that of a woodcut or a high-contrast halftone print.

神の存在について否定はしませんでしたでしたが、彼の人生において、宗教はそれほど重要なものではありませんでした。

そのため、この20年近くの間、どこの教会にも足を向けたことはありませんでした。

信じる努力が、 確信に変わる

ドン・L・サール

カリフォルニア伝道部の宣教師たちが、初めてシジフレド・ベラノに出会ったとき、彼はとても福音に興味があるようには見えませんでした。長い髪に、伸び放題のひげは、ちょっと見ると、まるで70年代のヒッピー族を思わせるような風貌ふうぼうでした。彼は、家族を養うために朝から晩まで働き詰めで、十分な教育も受けられなかったため、少ない睡眠時間を削って自分で勉強をしながら、もっと良い収入の仕事につけるように努力していました。そんな彼が、宣教師の話聞くために時間をとるということは、非常にむずかしいことでした。

彼の職場の友人たちはほとんど、無神論者か不可知論者でしたし、シジフレド自身も、この20年近くの間、どこの教会にも足を向けたことはありませんでした。

宣教師たちが、初めて彼の家のドアをノックしたとき、応待に出たのは彼の妻のアナ・ルシアでした。彼女は宣教師たちの訪問を快く受け入れ、シジフレドの時間さえとれば、家庭集会も可能であると言いました。毎日のように宣教師たちが訪問を続けていたある日のこと、やっとシジフレドとのレッスンの時間をとることができました。

宣教師たちの愛と、献身的な努力により、またベラノ家の子どもたちの純粋な信仰により、シグ（シジフレドのニックネーム）とアナは、末日聖徒に改宗しました。彼らの改宗は、宣教師たちの努力はもちろん、彼ら自身の努力と従順な心が彼らの証を強めたからにほかなりません。

シグ・ベラノは、1963年に、南米コロンビアからカリフォルニアへ移民してきたのでした。結婚を約束していたアナは、彼がアメリカの地で十分に家族を養って生活していただくだけの土台を築くことができるまで、コロンビアに残って移民を待ちました。

シグは、コロンビアでは3年間しか学校に通うことができませんでしたし、英語もほとんど話せませんでした。ロサンゼルスでの彼の最初の仕事は、非常に低い賃金で帽子を作ることでした。彼は働きながら、毎日のように新聞広告を見ては、もっとよい仕事を探しました。

あるときシグは、高賃金の機械工見習いの求人を見つけました。機械工とは、南米では鉄道機関士のことで、かなり良い仕事であったため、すぐに応募をしました。

シグは、熱心に見習い工として働きましたが、ときどき、いつになったら「大きな機械」^{*}を使わせてもらえるのかと、同僚に聞きました。みんなは見習い期間が終われば使わせてもらえるよ、と言います。でも、見習い期間の終わりになっても何の話もありません。ある日シグは、この仕事はどの位汽車に乗るのかと尋ねました。すると同僚は「この仕事は汽車とは何も関係がないよ」と答えたのです。ようやくシグは誤解に気づきました。

しかし機械工としての仕事は、シグとアナが生活していくためには十分な収入をもたらしました。ふたりはしばらくの間離ればなれではありましたが、手紙によって互いに励まし合い、1964年に代理人を通して結婚式を挙げ、翌年アナがアメリカ合衆国に移民して来ました。1966年にふたりの最初の子供であるエディソンが誕生し、1968年にジュリーが、そして1972年にマーベルが誕生しました。

シグは、教育面でも経済面でも進歩できるように自分で勉強を続けました。アナはシグのことをこの様に話しています。「彼は、ひとつのことを学び終わると、また新しいことを学び始めました。」こうして彼は、非常に熟練した引く手あまたの自動車機械修理工になりました。

シグは、神の存在や人間の罪について否定はしませんでした。彼の人生において、宗教はそれほど重要なものではありませんでした。しかし、彼の職場の無神論者、不可知論者の友人たちの考えをすべて受け入れているわけではありませんでした。あるとき、シグは非常に印象に残る経験をしました。それは無神論者の友人のひとりに、この様な質問をしたときのことです。「もし君が、教会に行くとしたらどこの教会に行くかね？」彼は答えました。「モルモンになるね。」そしてその理由は、末日聖徒の教えは徹底していて、確かに良い教えであるからだと言いました。

実際、彼の知っていたただひとりの末日聖徒の友人の模範はすばらしいものでしたし、シグ・ベラノが末日聖徒の宣教師から話を聞く決心をしたのも、彼の模範を知っていたからかもしれません。シグにとって宣教師の口から語られる言葉は、確かに真実でした。特に「知恵の言葉」に関する教えは、若い機械工のシグにたばこお酒をやめるに十分な衝撃を与えましたし、祈りを始める決心も彼はして

いました。しかしながら、彼にとっては毎週教会に行くことがむずかしい問題で、教会に出席できない週が何度か続いたことが彼の足をにぶらせる結果となり、ついには宣教師からレッスンを受けることも断わるほどになりました。

しかしベラノ家の子どもたちは、週に一度の初等協会をとても楽しみにしていたので、シグとアナは、かわるがわる子供たちを教会まで車で送り迎えしていました。ある安息日、故障で車のエンジンがかからなくなってしまいました。シグは子供たちに言いました。「車の故障じゃしかたがないね。今日は教会には行かないよ。」

しかし6歳のエディソンは、教会に行くことを決してあ

きらめませんでした。彼は、家族みんなで祈れば必ず教会に行けると信じていたのです。シグの家族は、みんなでひざまずいて祈りました。それからもう一度車に戻ってみると、驚いたことにエンジンがいつものように調子良くかかったのです。だれよりも驚いたのが、シグであったことは言うまでもありません。

このことがあってから、ベラノ家族は、再び教会に集い始めるようになりました。でも毎週というわけではありませんでした。ところが、そうしている間に偶然と思えることが次々と起こったのです。コロンビアからシグたちに会



いに来たシグの義理の母親は、彼女の家の近くにある教会の立派なアメリカ人青年宣教師たちについて話しました。彼らは、末日聖徒の宣教師たちでした。また、船乗りをしている幼なじみの友人が、コロンビアからシグたちの家族を訪れたときのことです。夕食の用意がととのったとき、彼はシグに、食事の前に祝福の祈りをしてよいかと尋ねました。シグはその祈りを聞きながら、彼が末日聖徒であるということをはっきりと知ったのでした。改宗者である彼は、長い航海の間中非常に熱心に聖典を勉強していました。そしてシグたちが宣教師からレッスンを受けているとも知らずに、ベラノ家族に自分の証を伝えていきました。



F. T. BARNETT

シグ・ベラノは、前に宣教師たちのレッスンを受けることを決めたときに、宣教師たちとひとつの約束をしました。それは、彼らがベラノ家に来るときには、福音の説教者としてではなく友人として来てほしいということでした。あるとき、ベラノ家にレッスンに来ていた宣教師のひとりが任期を終えて帰還することになり、宣教師たちはベラノ家族を教会で行なわれる「送別会」に招待しました。その会場で末日聖徒の愛に接したベラノ家の人々は、再度レッスンを聞くことに決めたのです。

レッスンが進むにつれて、シグはバプテスマを受けて末日聖徒に改宗することを真剣に考えるようになりました。しかしアナは、祖国コロンビアで先祖代々属していた教会ですでに洗礼を受けていたため、再びバプテスマを受けることは拒みました。そこでふたりは話し合っ、シグがバプテスマを受けたあと、子供たちを初等協会に連れていくのはシグの役目とし、アナは今まで通り自分が属している教会に行くということにしました。

ところが、シグのバプテスマが1週間後に迫った日から、アナは毎晩同じ夢を見るようになりました。それは、救い主イエス・キリストがヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けている夢でした。アナはこの夢から、主が彼女に本当に正しいことを決心するように告げておられるのだということを確認しました。

1974年の1月に、シグとアナは、共にバプテスマを受けました。そして長男のエディソンは、それからまもなく、8歳の誕生日を迎えるとすぐにバプテスマを受けました。

バプテスマを受けたあとも、ベラノ家族にはいくつかの問題が起きましたが、彼らに対する教会員たちの助けは決してやむことがありませんでした。

ジョージ・ベイカー兄弟は、ベラノ家のホームティーチャーとして、彼らが毎週教会に集えるように本当によく助けました。ベラノ兄弟にとって、朝7時から始まる神権会に出席することは、到底無理なことでした。仕事が真夜中から翌朝6時までだったからです。しかし毎週必ずベラノ家に車で迎えに行く教会員をベイカー兄弟が手配してくれたおかげで、ベラノ家はすべての集会に出席できるようになりました。

こうしてベラノ家族は熱心に集会に集い、すべての戒めに従順に従うことにより、信仰篤い、すばらしい末日聖徒の家族へと成長しました。

1978年にベラノ兄弟は、ステーク部内に初めて組織された、最初のスペイン語支部の支部長に召されました。そして5年後に支部がワード部となり、彼は監督となりました。

スペイン語支部が組織されたことは、アナにとっても大きな祝福でした。英語がほとんどわからない彼女にとって、英語を話すワード部での活動に参加することは大変なことだったのです。ですが、スペイン語支部が組織されてから

は、アナもベラノ兄弟をよく助けて、支部のために熱心に働きました。

「私の、主に対する強い証は、教会で熱心に働くことによって得られました」とベラノ兄弟は話しています。彼は、うまずたゆまず奉仕をし続けることが、自分の証を強める最良の方法であることを確信しています。

最初のスペイン語ワード部は、会員数の増加に伴い分割され、ワード部の数も増え、ベラノ兄弟は高等評議員に召されました。現在、彼は3つのスペイン語ワード部を有する、ロサンゼルスカリフォルニア北ハリウッドステーク部のステーク部幹部書記として働いています。アナもステーク部の英語の人名抄出プログラムの召しを受けて働いています。

シグ・ベラノ兄弟が長い間学び続けた様々な分野の中で彼に最も大きな影響を与えたのは、不動産売買の経験であると言えるでしょう。彼はこの仕事を通して、大きな証を得ることができました。

彼の不動産売買の仕事のスタートは、とてもさい先が良いとは言えませんでした。新人セールスマンの彼が、宗教上の理由で日曜日の勤務を断わったとたんに、不動産会社の社長は彼に解雇を言いわたしたのです。

ベラノ兄弟は、自分の人生にとって福音がどんなに大切なものであるか、また安息日に教会の集会に出席できないということが、教会員として、どんなに空虚なことであるかを、社長に説明しました。社長は「モルモンは宗教活動に時間をかけすぎるから成功しないんだ。成績のことをあまりとやかく言わない小さい会社に行くんだな」と言ったのです。ベラノ兄弟は、その試練を進んで受け入れました。その会社を去ったあとも、すぐに以前より大きな不動産会社の仕事を見つけ、1979年の1年間パートタイマーとして働き続けました。彼は正社員ではありませんでしたが、その年の最高の販売実績を上げました。教会の支部長やワード部監督として働いていた間も、土曜日の教会奉仕活動には必ず参加しながらも、会社の販売実績においては常に上位から5番目までには入っている優秀な社員でした。

彼は非常に謙遜な人です。主が確かに生きておられ、救い主イエス・キリストが確かに私たちの贖い主であるということと、また現在も生ける予言者がこの地上で私たちを導いてくださっていることを知っていますと証します。「知っている」という言葉を使うのは、福音が真実であると信じる心から、実際に福音を実践することにより、また福音に対する従順な心と、他の人々への奉仕を通して真実を確かに知ることができたからです。

ベラノ兄弟は、この様に証しています。「私が、バプテスマを受けて末日聖徒になったとき、福音が真実であると信じていました。しかし、信じる努力が確信に変わり、今はこの福音が真実であると確かに知っています。」□

「お父さんのために祈って」

エレイン・S・マッケイ

何年前、私は教会の総大会に出席するために、初めてソルトレークシティのタバナクルに行きました。その建物の大きさはもちろんのこと、それ以上に私はその場に集われた霊性に満ちた教会幹部の方々に畏敬の念を覚えました。

子供のころ、多くの幹部の方々がモンタナにある私たちの小さな支部を訪問してくださいました。当時はテレビもなく、ラジオで大会の模様を聴くこともできなかったのです。ですから、私たちは毎回の教会幹部の訪問を特別な祝福として心待ちにしていました。彼らには、他の人に見えない力と信仰があるように見えたのです。

タバナクルに行ったその4月に、私は教会幹部の力強さの源をひとつ発見しました。

私はエズラ・タフト・ベンソン長老の

6人の子供たちと一緒に大会に出ていました。そのうちのひとり私の大学時代のルームメイトでした。次の話者がベンソン長老であるというデビッド・O・マッケイ大管長の発表とともに、私は壇上に注意を注ぎました。私は、今まで一度も会ったことのないベンソン長老がマイクの方に向かって歩いてくるのを尊敬の気持ちで見守っていました。彼は1メートル80は優ゆうにある大柄な人でした。彼は合衆国の農務長官として国際的に名高い人であり、また主の特別な証し人、心穏やかな自信に満ちた人、世界中で説教を続けてきた人でした。突然、私の腕にだれかが手を触れたのです。ベンソン長老の小さな娘さんのひとりが私の方に身を寄せると、せがむようにこう言ったのです。「お父さんのために祈ってね。」

一瞬驚いた私はこう思いました。「きつと前の方から伝わってきたんだわ。次の

人に伝えなくては。『ベンソン長老のために祈って』と言うべきかしら、それとも『お父さんのために祈るのよ』とでも言えればいいのかしら。」早く伝えなければいけないと思った私は、次の人に身を寄せると同じように「お父さんのために祈って」とだけささやきました。そのささやきは次々に伝わっていき、ベンソン姉妹の所までいきました。姉妹はすでに頭を垂れて祈っていました。

その日以来、幾度となく私は「お父さんのために祈って」というメッセージを思い起こしてきました。地方部長としてあるいはホームティーチャーとして働く父親のために祈ってください。市の団体の幹事となった父親のために祈ってください。仕事が順調にいっているとき、またそうでないときも祈ってください。家庭の夕べの中でいろいろな勧告を与えてくれる父親のために祈ってください。ま



た息子が伝道に行き、娘が大学に行けるように毎日働いてくれる父親のために祈ってください。聖餐会で話をする父親のために、あるいは健康になるように母親に祝福を授ける父親のために祈ってください。子供にバプテスマを施す父親、生まれたばかりの赤ちゃんに命名し祝福を授ける父親のために祈ってください。夜疲れて、あるいは失望して帰宅する父親のために祈ってください。事の大小にかかわらず父親のすることすべてのために祈っていただきたいのです。

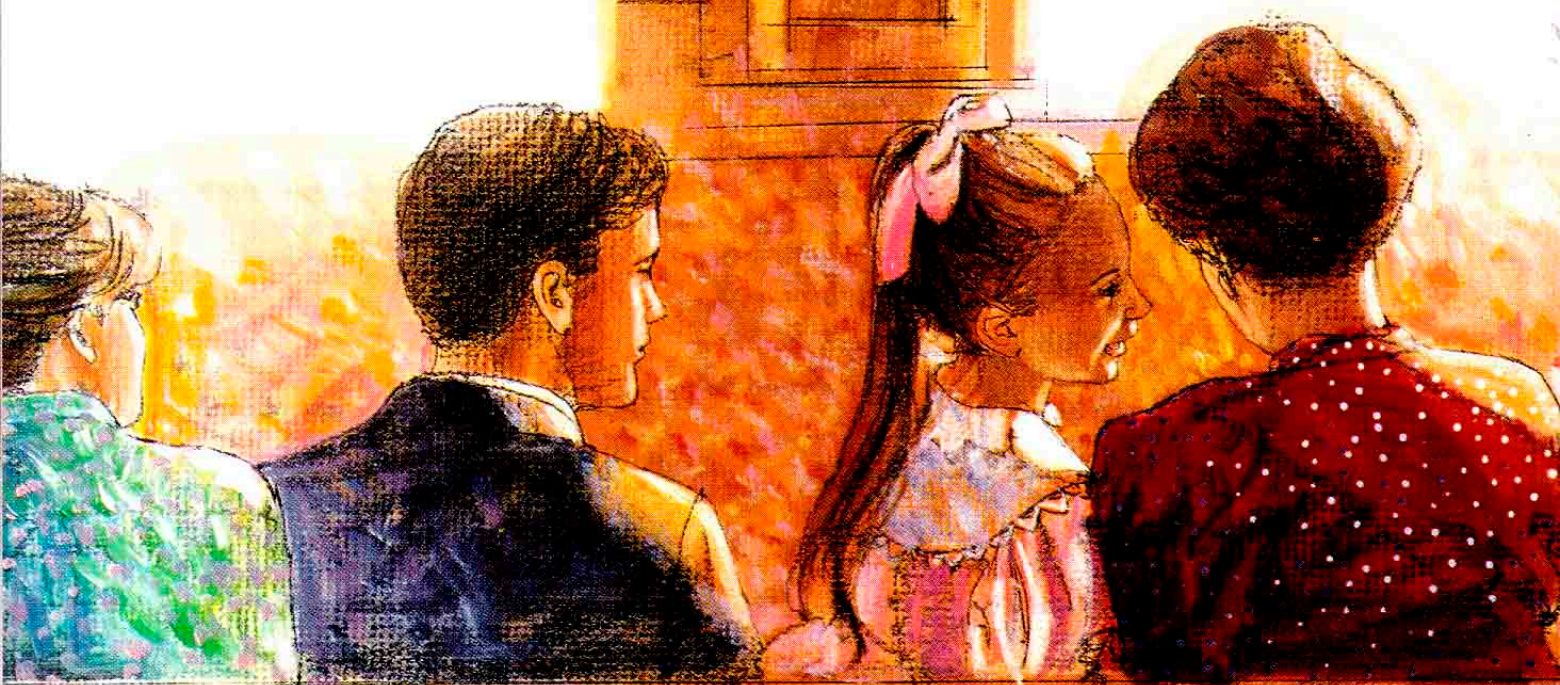
月日が経ち、総大会も回数を重ねてきました。その中でベンソン大管長が立っ



て話をするたびに思ったのは、「今は大きくなってそれぞれ違った町に住んでいる彼の子供たちも、この瞬間だけは一致して父親のために祈っている」ということでした。

私は何年も前にあのタバナクルの中で、私の耳に入ってきたあの短い伝言こそが、家族にとって最も大切なメッセージであると確信するに至ったのです。日々直面する試練の中で、世界のどこかで娘や息子の「お父さんのために祈って」というささやきが聞かれるとしたら、どれほど大きな力と信仰を得られることでしょう。

□



秋元彬江姉妹、 アリソン・エルドリッジ姉妹 来日

音 楽界のシーズンが新たに始まる9月、ニューヨークからピアニストである秋元（エルドリッジ）彬江姉妹とチェリストであるアリソン・エルドリッジ姉妹（彬江姉妹の娘さん）が来日されました。彬江姉妹は、10歳で全日本学生音楽コンクール入賞、13歳で大阪フィルハーモニーオーケストラとモーツァルトのピアノ協奏曲を共演しています。1964年にジュリアード音楽大学入学、ワシントンD.C.で行なわれた国際パッサコンクール第1位という輝かしい経歴を持ち、現在は米国内でピアニストとして活躍、国際コンクールの審査員として、大学の客員教授として後進の指導にも力をそそいでいます。1960年初頭には、教会堂の建築資金を集めるために日本全国でピアノコンサートを開かれたこともありま

す。ご主人は現在、ブリガム・ヤング大学の政治科学部の教授をされています。

今回の来日は、娘さんであるアリソン姉妹の日本でのデビューコンサートのため、彬江姉妹ご自身もピアノでの共演をされました。コンサートは9月6日のサントリーホールを皮切りに各地で行なわれ、9月15日には、チェリストの巨匠パブロ・カザルスにちなんで造られた水道橋のガザルスホール主催、「第4回カザルスデビューコンサート」として行なわれました。母娘の来日ということで、音楽関係、婦人雑誌等の記者も大勢つめかけ、大変な盛況となりました。

アリソン姉妹は、1971年生まれ現在18歳で、3歳のころから彬江姉妹からピアノを習いはじめ、9歳でチェロに転向。そして、

CASALS HALL

アリソン・エルドリッジ (Alicia Eldridge)

9月15日 20:00開演

秋元彬江



彼女がすべてを手に入れている。若さ、才能、音楽性そして未来……。ヨヨー・マ

カザルスホール

そのわずか6カ月後にコンクールで優勝し、以後、ジュリアード音楽院プレ・カレッジ・チェロ・コンクール、ロサンゼルス・フィルハーモニック・ステューデント・スターズ・コンクールほか、数多くのコンクールに優勝し、1982年からヤング・アーティスト基金の奨学金を受けています。音楽界の第一人者たちから「若き天才チェリスト」として絶賛され、今回の来日もエマニュエル・アックス、ヤンウク・キム、ヨヨー・マのバックアップによって実現しました。

アリソン・エルドリッジ姉妹

3歳のときからお母さんにピアノを教えられ、毎日2時間の練習をこなしていたアリソンでしたが、ピアノを弾くのがとてもきらいで、ついに9歳のときに家を出してしまったそうです。そのときのことをお母さんの彬江さんはこう語ります。

「本当にびっくりしました。ある日階段のところに荷物と食べ物を入れたバックを持って立っているんです。何をしてるのと聞くと、『今から家出するの』と言うでし

よ。もうあっけにとられてしまって、そのときはほかの生徒のレッスンの最中でしたから、よく話すこともできなくて、すぐ戻ってくるだろうと思っていました。それでこの娘は出て行って、近くの庭先のところにいたらしいんですが、蚊は飛んでくるし、食べ物はなくなるので大変だったらしく、すぐ戻ってきました。それほどピアノがきらいだったんでしょうね。」

アリソンは、「どうしてきらいだったかと

いうと、お母さんはもちろん、妹もおばあさんもみんなピアノばかりで、それできらいになったんです」と言います。

小学校4年生のときに、何かほかの楽器を演奏してみたいと思い、オーケストラ部に入りました。しかし、そのオーケストラ部に残っていた楽器はチェロだけで、その他の楽器は皆ほかの生徒たちが使っていました。アリソンは必死で頼み、毎日2時間のピアノの練習を必ずするという条件で、チェロを弾くことをお母さんに許してもらいました。

そして、ピアノとチェロの両方を弾くようになったアリソンは、チェロを始めてなんと6カ月後にコンクールで優勝しました。その後は、どのコンクールでも必ず優勝す

るという天才的なチェリストとしての道を歩み始めました。

彼女の成長ぶりに周囲の人は驚くばかりで、世界的に有名な女性チェリストのザラ・ネルソヴァの招待を受け、演奏をしたこともありましたが、彼女もアリソンの演奏に驚嘆し、その才能にふさわしいチェロを持ちなさいと言って、世界に6台しかないといわれるフランスのルーポチェロ3/4を1台調達し、アリソンに渡しました。

13歳のときには、レーガン夫人の招待を受け、ホホワイトハウスで演奏し、14歳になるとニューヨークに移り住み、ハーベイ・シャピロに師事、現在は世界のトップといわれるヨーヨー・マに師事し、「若き天才チェリスト」として全世界の注目を集めています。

また福音によって育てられた彼女は、「クラシック音楽と宗教音楽には共通するものがたくさんあります。主への祈りや嘆願、その他の感情を表現するのに、小さいとき

から教会員として過ごしてきたことは、私にとってとても大切なことです。もし、福音の中で育てられていなかったら、私の演奏は今とは違うものになっていたでしょう。将来は音楽だけに偏らず、すべての分野において幅広く、人々を理解できる人間になりたいです」と語ります。

「若さ、才能、音楽性、そして未来……。彼女はすべてを手に入れている」とヨーヨー・マが語るように、これからの彼女の活躍が大いに期待されます。次回の来日を楽しみにしましょう。(編集室)



● 彬江姉妹(右)とアリソン姉妹

3つの名前

フライアン・J・ナンバ

19歳は私にとって、たくさんの問題を決定しなければならない年齢でした。大学へ入るか、徴兵に取られてベトナムへ送られるか、あるいは伝道へ行くべきか。何度か監督から伝道へ行くように勧められましたが、私は伝道に対する確固とした思いがなく、監督の勧めを断り続けていました。

しかし、私がかつて受けた祝福師の祝福の中には「召されて故国に於て、また故国を離れて福音を広める。特にあなたと同国の人々の間で導く者となる」とありました。同国の人々とは日本人のことですので、私は自分にいつか日本へ行く機会が来ると期待し、信じていました。

それが伝道に行くことを意味するのかわかきませんでした。いつか日本に行くことを願っていたのです。そのため、もし伝道に行かなければ祝福師の宣言したこの祝福を逃すかもしれない、そう思うと不安でたまらず、逡巡の末、ようやく伝道

へ行く決心を固めました。「もしも、私がこの教会が真実でない悟ったなら、いつでも伝道を切り上げて自分の家へ帰ることができる。伝道に行くことによって失うものは何も無いはずだ。」こう自分に言いかけたのです。

伝道の召しを待っている間、私はユタ州のテイラースヴィルにある父の野菜畑で働きました。配達をしている間、日本からユタ州へ移住し、半世紀以上農業を営んできた祖父母のことを思い起し、日本のどこで伝道をするようになるのか、思いを巡らせていました。

伝道の召しが届き、「日本のどこへ召されるのだろう」と期待に高鳴る胸を抑えて封を開けました。しかし、そこには「ブラジル中央伝道部」とあったのです。

私の受けたショックはとても大きなものでした。日本に行けるということが伝道に出る決心をした大きな原因でもあった私は、すっかり意気消沈し教会に対する疑いの念

を持ち始めました。何日間か悩みました。私の心は不安でいっぱいでした。ひとりによく考えてみなければならない。そう思い、人けの無い静かな所へ行きました。伝道の召しも靈感によるもの、祝福師の祝福も靈感によるもの、とすればなぜこのように食い違うのか、……こう考えながら私が山のふもとの小さな丘にさしかかったとき、私の不安な気持ちは遠のき、やはり予言者の靈感を信じて召しに従うべきだと強く感じたのです。どうして、そのような安心した気持ちになれたのかその理由はわかりませんでした。予言者の靈感に従う決心をし、承諾の通知を出しました。

私が伝道へ出発する当日、私の祖母(山崎ヤスヨ)は、たどたどしい英語で「これは私の妹と兄弟2人の名前だ。3人とも今から50年ほど前に南米のどこかに引越して行ったが、もしお前がブラジルで日本人に会うことがあったらこの3人のことを聞いておくれ」と言って私に「ヨコヤマ・スエノ、ヨコヤマ・ヨシオ、ヨコヤマ・シロー」という3人の名前の書いてある紙を1枚渡しました。「はい」と素直に答えた私でしたが、ブラジルにいる200万人以上の日本人の中からそこにいるのかも定かではない3人を探しだすのはどうい無理

なことだと思いながら伝道地へ向かいました。

伝道も半ばを過ぎたころのある寒い夕方、同僚と私は伝道本部に近いある日本料理店に入りました。スープを飲み終わると店の主人が「あんたたちはアメリカ人かね、私の親戚がアメリカにいるのだが」と話しかけてきました。この主人といろいろと話したあと、食事代を払おうと財布を出してみると祖母からもらった紙が入っているのに気づき、思いきってその紙を見せてみました。主人はじっとその紙を見入っていましたが、「私はこの人たちを知らないが、県人会の人に聞けばわかるかもしれない」と日本人移民の資料のある県人会の住所を教えてくださいました。

2カ月後、私は伝道本部の許可を得て、同僚と共に県人会事務所を訪ねました。事務所に入ると80歳くらいの日本人の男性に迎えられました。奥の部屋の席に通され日本茶を勧められましたが、私たちはそれを丁重に断わりさっそく3人の名前を見せました。するとこの老人はいろいろな資料を調べた末、にっこり笑いながらペンハ郊外のひとつの住所を私たちに教えてくださいました。

私たちがそこへ着くと若い日本人の女性に会いました。そしてその女性にこの3人のことを聞くと、非常に驚いた様子で「このヨコヤマ・ヨシオは私の義理の父にあたる人です」と言ったのです。奇跡が起こりつつあることを私は感じました。それからさっそくその本人の所へ案内してもらいま

した。彼女の義理の父というその老紳士は小柄で穏やかな話しぶりの謙遜な態度の人でした。彼は写真を箱から出し、私に見せましたがそれはまぎれもなく私の家族の写真でした。

私は祖父母、そして先祖の事についていろいろ尋ねたところ、彼は地下室から百年以上昔の家族に関する資料(過去帳)を持ってきてくれました。その中には私の家族の分家に関する完全な記録があったのです。それからその老人は弟の「ヨコヤマ・シロー」は1954年に亡くなったが、妹の「ハシモト(ヨコヤマ)・スエノ」は夫の「ハシモト・トミオ」と共に私の伝道区域の最も北の端にあるサンホセ・ドス・カンボス市の市場で働いていることを教えてくださいました。

それから1カ月もたたないうちに私はスエノさんの住んでいるという地域に赴任しました。この場所を教えてくださいました大叔父「ヨシオ」は大叔母の住んでいる所番地を知らなかったため、私は市場の隅から隅までくまなく探し回りました。しかし、いくら探し回ってもわからず、もうだめだとあきらめかけたとき、通りがかった日本人の婦人呼びとめ、「『スエノ・ハシモト』を知っていますか。」と、祖母にももらった例の紙切れを見せて尋ねたところ、この婦人は思い当たるところがあるらしく、私と同僚を市場の中のある果物屋まで案内してくれました。

その店の主人に、私が山崎(横山)ヤスヨの孫であることを話すと彼はすぐに店をたたんで、私たちを家の中へ通してくれました。この主人が「スエノ」の夫「トミオ」

だったのです。

応接間で待っていると、彼の妻「スエノ」は紹介も待たずに走りこんで来て、椅子の中に泣き崩れました。

ご主人は流暢なポルトガル語で、妻スエノは50年以上もの間、姉の安否を気遣い、消息がわかるようにと祈り続けてきたこと、姉に会えるならいつ死んでもかまわないとよく言っていたことなどを話してくれました。私の祖母ヤスヨは「写真花嫁」としてアメリカのアイダホ州に住んでいた私の祖父と結婚しました。妹の「スエノ」は当時まだ8歳で、広島島の棧橋で手を振って別れてから57年の間ついに再会の機会に恵まれなかったのです。

私が伝道から帰って1年後、彼女はその夢を果たすためにアメリカを訪れ、私の祖母との再会を果たしたのです。

予言者が与えてくださった伝道の召しが真の靈感によるものであることを私は知りました。主なる神が、この奇跡を実現するために、私を道具として使ってくださいましたということを知ったときの喜びは、私の生涯のうちでも最も尊い経験のひとつです。主は、私の家族一門、そして先祖に永遠を通じて結び合わせてくださるための、意味深い再会の基を備えてくださったと強く感じます。このことが私たちの幸福の鍵となるに違いありません。

(ブライアン・J・ナンバ 1952年生まれ、ソルトレークシティ日本人第1ワード部第二副監督)

編集室から

●お詫びと訂正

本年度9月号ローカルページ、「ワード部支部特集(p.6, p.7)の松本哲典兄弟と望月善一兄弟の顔写真が入れ違っていました。深くお詫び申し上げます。

●原稿を募集しています

▶各地のたよりの原稿を募集しています。来年3月号掲載分の締切は12月26日(必着)です。

▶あて先: 〒106東京都港区南麻布5-10-30

末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264



●ブライアン・J・ナンバ兄弟とご家族

信仰を語り継ぐ地と なるでしょう

遠藤 大



います。後世に私たちの子孫がこのクモラの丘霊園を訪れて先祖に思いをはせ、信仰を語り継ぐ安息の地となることでしょう。

エジプトのピラミッドの前に立ったとき、人間が蟻のように小さく見え、時間と空間を越えるタイムカプセルそのままの迫力、墓の持つ不思議とロマンを感じました。

私たちのクモラの丘霊園も、先祖と子孫が出会うタイムトンネルのようだと感じます。どうぞ、クモラの丘霊園を一度訪れてみてください。

すでに墓石に誌されている先輩たちに恥かしくない信仰を持って現世を終えることができるように、今を大切に生きたいと思います。(えんどう・だい 1941年生まれ、横浜ステーキ部第2副ステーキ部長)

●遠藤兄弟とご家族

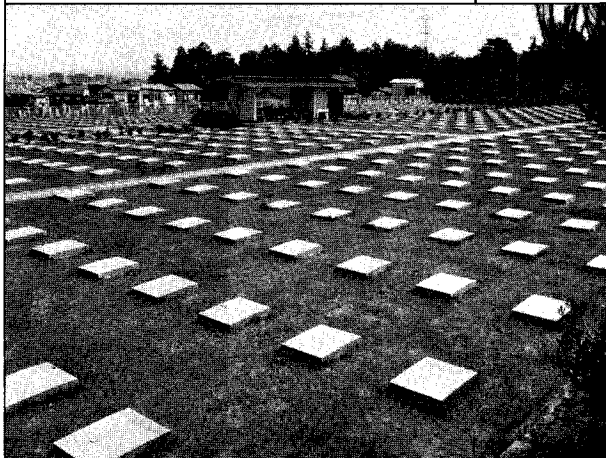
ージ・マハル廟は白亜の大理石の墓で、確かに世界一美しい建物でした。けれど、クモラの丘のこの小さな墓石にも夫婦愛の美しさを永遠に誌することができるのです。

クモラの丘霊園には、すでに来世に旅立った日本の末日聖徒の先輩たち、開拓者が墓石にその名を誌され、復活の朝を待って

3 年前初めてクモラの丘霊園を訪れたとき、一面の芝生の中に白いみかげ石が美しく並んだ墓地に立ち、アーリントン墓地にケネディ大統領の墓を訪れたときのことを思い出しました。黒い墓石が芝生の中に埋っただけで、左右に子供の墓石が配してあり、実にシンプルで、炎はその日以来燃え続けているとのこと……。なつかしい思い出がよみがえった瞬間、わが遠藤家もこのクモラの丘霊園の購入を決めました。横浜から車で1時間半の距離は、休日などに気軽に行けます。

そしてクモラの丘霊園の写真を撮ってステーキ部内に配付して紹介し、親族や親しい教会員に声をかけ、まとめて申し込み手続きを済ませました。これでクモラの丘霊園に横浜アベニューが誕生しました。(すでにひばりヶ丘通りもあると聞きました。)

今年5月22日地区代表の浅間長老の奥様の照子姉妹が天に召され、24日に約千名の参列者の中で告別式が行なわれました。葬儀は照子姉妹を偲んでのお話と歌で、終始家庭的な雰囲気の中で執り行なわれました。納骨はクモラの丘霊園で、浅間長老の祈りと賛美歌で、親族の方々と共に、しばしの別れを惜しまました。ささやかな生花につつまれた墓石の「最愛の妻照子」と彫られた文字が夫婦の絆が永遠であることを天地に宣言しているかのようで感動しました。皇帝が王妃のために建てたインドのタ



1989年度 「クモラの丘 霊園」分譲の お知らせ

●所在地：埼玉県入間郡

毛呂山町長瀬1313

「1988年度クモラの丘霊園分譲」の募集は、本年12月31日で締め切り、来年度の新しい募集を以下のとおり行ないます。

1. 墓地永代使用料 1区画280,000円
支払い方法 一括または分割払い。分割払いの場合は、初回金5,650円以降毎月4,650円59回払いの無利子分割払いとなります。
2. 墓地管理料 年間3,000円(初回金とともに1年分を前納し、以降毎年定められた期日までに支払うものとします)
3. 申し込み方法 以下の書類をクモラの丘霊園事務局に提出してください。
(1) クモラの丘霊園使用申し込み書
(2) 住民票
(3) クモラの丘霊園永代使用契約書 2通
(4) 銀行自動振替手続き書類
4. 申し込み期限 1989年1月1日より1989年12月31日まで
5. 墓所の指定 申し込み書類受領確認の後、順番に行ないます。
6. 初回金及び管理料の振込先
三和銀行青山支店 普通預金口座 219499
クモラの丘霊園 代表 北村正隆
7. お問い合わせ 〒106東京都港区南麻布5-10-30
末日聖徒イエス・キリスト教会内
クモラの丘霊園事務局 電話03(440)2351(代)



5月に 召された JMTC 第108期生 23人の名簿

S:ステーキ部, D:地方部, M:伝道部,
W:ワード部, B:支部

左から1~8 9~16 17~23



《名 前》	《出身地》	《伝道地》	《名 前》	《出身地》	《伝道地》
1. 岩下 聖子	鹿児島D/鹿児島B	岡山伝道部	13. 谷口恵美子	札幌S/新琴似W	神戸伝道部
2. 阿部 倫子	横浜S/横浜第1W	神戸伝道部	14. 成澤あかね	東京西S/府中W	名古屋伝道部
3. 上田真奈美	沖縄那覇S/小禄W	東京南伝道部	15. 堀田 里美	東京南S/渋谷W	大阪伝道部
4. 柏倉 基子	福知山D/福知山S	名古屋伝道部	16. 四元 恵子	鹿児島D/鹿児島B	神戸伝道部
5. 渡辺ひろ子	東京北S/浦和W	札幌伝道部	17. 岡田 健	東京西S/府中W	大阪伝道部
6. 森 裕子	北陸D/富山B	仙台伝道部	18. 原 康	岡山S/岡山西W	仙台伝道部
7. 吉谷真由美	福岡S/佐賀W	札幌伝道部	19. 新垣朝明	東京北S/越谷W	神戸伝道部
8. 田代 智子	大阪堺S/河内長野B	札幌伝道部	20. 吉田 裕行	岡山S/岡山西W	札幌伝道部
9. 近藤美香	福岡S/北九州W	仙台伝道部	21. 佐々木正徳	青森D/弘前B	大阪伝道部
10. 井上弘美	大阪北S/京都洛北W	札幌伝道部	22. 福若康広	大阪S/茨木W	神戸伝道部
11. 小川久子	福岡S/北九州W	東京南伝道部	23. 鬼頭 一高	名古屋西S/高畑W	福岡伝道部
12. 黒田真美	東京北S/川越W	大阪伝道部			

9月に 召された JMTC 第112期生 10人の名簿

S:ステーキ部, D:地方部, M:伝道部,
W:ワード部, B:支部

左から1~10



《名 前》	《出身地》	《伝道地》	《名 前》	《出身地》	《伝道地》
1. 田辺 恵子	東京北M/新潟B	大阪伝道部	6. 福治 依子	名古屋S/岡崎W	神戸伝道部
2. 森 淳子	東京北S/豊島W	大阪伝道部	7. 上田 典子	岡山S/鳥取B	大阪伝道部
3. 宇崎 睦子	東京北M/新潟B	仙台伝道部	8. 吉武 宏明	東京西S/国立W	大阪伝道部
4. 川合 栄美	東京東S/北千住B	福岡伝道部	9. 田村 誠	仙台M/秋田B	神戸伝道部
5. 谷 美穂	高松S/高松W	札幌伝道部	10. 古川 孝	東京北S/中野W	福岡伝道部

神の娘たちの集い、華やかに 東京東ステーキ部ガールズキャンプ

夏をあまり感じさせないうちに今年
の夏は行ってしまいました。

そんな夏らしからぬ夏にチャレンジするか
のように8月2日、3日、4日の3日間、
茨城県の「常北家族旅行村藤井川ダムふれ
あいの里」で東京東ステーキ部主催のガ
ールズキャンプが行なわれました。「ホッ
プ、ステップ、夏少女」というテーマで開催
された神の娘らの集いをレポートしましょう。

8月2日午前10時30分常磐線赤塚駅に
元気に集合し、水戸ワード部や牛久ワード
部の兄弟姉妹の車に分乗して、ふれあいの
里に向かいました。台風の影響で雨模様
の天候でした。この天候は、キャンプ期間中
続きましたが、神の娘らの強い信仰のおか
げで、野外でプログラムを行なう時間にな
ると日が射し、予定したすべてのプログラ
ムを滞りなく行なうことができました。

1日目は、キャンプに対する不安と期待、
それに友達はたくさんできるだろうか、火
をちゃんと起こせるだろうか等、いろんな
想いを抱きながらの入村式、オリエンテー
ションに臨みました。しかし、夕食を準備
し、野菜のためのようになったバーベキュー
を食べるころにはみんな仲良くなれたよ
うでした。

総勢47名の今回のキャンプで若い女性
の姉妹たちが一番楽しみにしていたのは、
おそらく2日目の料理コンテストでしょう。
6班に分かれて、それぞれで考えてきた料
理の味と見栄えを競うのです。すでに各ワ

ード部支部でマスターしてきたはずの火起
こして苦労した班もありましたが、いろ
んなアイデアに富んだみごとな料理ができ
あがりました。私も審査委員としてご相伴
にあずかりましたが、2班のあのお好み焼
きは本当においしかったです。

そして2日目のクライマックスはキャン
プファイヤーでした。牛久ワード部の神崎
武次郎兄弟の指導で荘厳に始まり、6班に
分かれた姉妹たちと指導者が伝道、教会、
友情、奉仕、学校、日常の生活というテ
ーマでスキットを披露しました。日ごろは新
人類と言われる姉妹たちも、「やるときはや
る」というところを見せてくれました。ど
の班も神様を賛美し、教会のすばらしさを
表現することを忘れませんでした。その演
技は見る者の涙を誘い、やはりこの子たち
は「神の娘」だという確信を持たせてくれ

ました。本当にすばらしい姉妹たちです。
最終日の証会がまた圧巻でした。大勢が力
強い証を述べ、涙、涙の証会でした。参加
した若い女性の姉妹たちはこのガールズキ
ャンプでキャンプ技術の修練を積んだのみ
ならず、友情を築き、自分たちが「神の娘」
であることを実感することができたよう
です。そしてガールズキャンプに参加する
ために助けてくださったいろいろな人に感謝
しなければいけないことも知りました。

ガールズキャンプに行けるように援助し
てくださったご両親、何回もミーティング
を持って準備してくれた実行委員会、キャン
プ場まで送迎してくださった水戸ワード
部、牛久ワード部の兄弟姉妹たち、事故の
ないように見守ってくれたキャンプ指導者、
元高校教諭でキャンプを指導してくださ
った神崎武次郎兄弟、夜中、兄弟たちが寝
ている間に見回りをしてくださった宮下久美
子ステーキ部若い女性会長、そのほか助け
てくださった大勢の方々感謝を述べたい
と思います。(レポーター：小森繁樹 東京
東ステーキ部高等評議員)



新 役 員 の 任 命

8月21日から10月3日までに管理本部会
員記録統計課に通知のあった役員の変更
(敬称略)

●鹿児島地方部

新地方部長：瀬座一義(前任者：中村良昭)

●名古屋ステーキ部豊田支部

新支部長：竹本洋一(前任者：鈴木章弘)

●三重地方部四日市支部

新支部長：斎藤栄三(前任者：木戸政吾)

●高松ステーキ部高知ワード部

新監督：浜田茂(前任者：別役光宏)

●高松ステーキ部徳島ワード部

新監督：福田光剛(前任者：石部建雄)

●東京東ステーキ部北千住支部

新支部長：伊藤宏(前任者：崎岡晴義)

●長野地方部諏訪支部

新支部長：松島清(前任者：平林清準)

●大阪ステーキ部飛鳥支部

新支部長：三木勉(前任者：田浦龍夫)

●神戸ステーキ部西宮ワード部

新監督：山口正伸(前任者：湯浅勲)

ガールズキャンプの証



松戸ワード部

松崎あかね



私はガールズキャンプに参加できたことを心から感謝しています。私は今、教会について勉強しています。教会に入ること家族に反対されていますが、キャンプで一緒に班になった班長の桐原友香姉妹に、バプテスマについて朝晩お祈りすることの大切さを教えられました。私は今、毎日朝晩、バプテスマが受けられるようにお祈りしています。このことによって、今まで寝る前はお祈りするのを忘れていたのに、毎晩お祈りができるようになりました。ガールズキャンプに参加できて本当によかったです。



八千代ワード部

乾 佐登子



みなさんこんにちは、私は今回のガールズキャンプに行つて本当によかったと思います。それは、私の模範となってくれる姉妹たちがたくさんいたからです。モルモン2世の私は、両親に教会を押しつけられているようで、以前から教会や神様を心の底から信じていませんでした。でも、今回のキャンプに行つてたくさんのお話を学ぶことができました。そして、今では心の底から神様を信じることができました。このガールズキャンプというプログラムは神様のつくられたプログラムです。また、モルモン経は、確かに神様の言葉であつて神様は確かにおられると証します。また、いつサタンの誘惑があるかはわかりませんが、絶対に誘惑に負けぬようこれからも証を強めていきたいと思っています。



鎌ヶ谷ワード部

清田奈美江



私はガールズキャンプに行く前、部活があるからという理由で、教会にあまり行っていませんでした。若い女性のみんなが、「先生に言って部活休ませてもらったら」と言うのですが、私は先生や先輩から変な目で見られるのがいやで、どちらかというと部活を優先していました。

ガールズキャンプの2日目の夜に、岡本ゆき姉妹がみんなの前で好きな聖句を発表したとき、私は頭もあがらないほどの思いをしました。「人からよく思われようとするのではなく、神様からよく思われるような人になるようにしたい」ということでした。今まで私は先輩からよく思われようと必死で、部活もさぼらず真面目にやってきました。でも、本当は神様からよく思われるようにしなければいけないということがわかりました。私は、班長さんの岡本ゆき姉妹にとっても感謝をしています。きっと、神様はゆき姉妹を通して私に教えてくれたのだと思います。

私は、これから教会にきちんと行くようにしようと思います。毎日お祈りをしてがんばろうと思います。



松戸ワード部

川北真理



キャンプの間、体の具合が悪く、周りの人に迷惑をかけているようで、気が重く、あまり楽しい気分にはなれませんでした。3日目の証会のおきも、家に帰つてからも、このキャンプで得たものが何だったのか、私にはわかりませんでした。

どのワード部でも第1日曜日の証会のおきにキャンプの証をした姉妹がいたと思います。松戸でもキャンプについての証をしてくれた姉妹がいました。そのときでさえ気がついていませんでした。でも私の心は証台にとっても立ちたい気持ちでいっぱいでした。会の間何度もお祈りしました。そして1番最後の時間ギリギリのときに証をさせてもらいました。そのとき、私は自分の得たものに気づきました。それは、キャンプの間、本当に温かく周りの人が助けてくれたことです。友だちの愛を、そしてお父様の愛をとっても深く感じることができました。証会のあと、賛美歌を歌っているときも、お祈りのときも、会が終わつてからも、私は神様の愛に満たされていました。すばらしいキャンプをどうもありがとうございました。そして、来年もガールズキャンプで会いましょう。

長野地方部 第2回 独身成人サマーカンファレンス 軽井沢にて開催

8月15日～17日の3日間、長野地方部独身成人は「輝きたいネ！」(大会テーマ)を合い言葉に、さわやかな地元の軽井沢の高原に集いました。地方部としての開催は今回で2回目ですが、名古屋、大阪、仙台など遠方の兄弟姉妹の参加もあり、総勢45名となりました。

大会目標は「各自が自分らしさを発揮することを通して、お互いに助け合い向上できる『永遠の友達をみつける』」こと、テーマ聖句は「見よ、兄弟が和合して共におるのはいかに美しく楽しいことであろう」(詩篇133:1)でした。

さて、長野地方部では、昨年第1回カンファレンスと同様、あらかじめ、趣味志向の近いメンバーを集めたグループで、独自に計画した活動を行なうことをメインとしました。そのため、各グループではリーダー、サブリーダーを中心に数週間前から連絡を取り合い、趣向を凝らした活動を考えることになったわけです。8月6日は「ドキドキときめき前夜祭」が開かれ、みんなの意気込みを見ることができました。

8月15日——カンファレンス第1日目の朝は軽井沢名物の霧。この高原に、澄んだ空気の中、期待に胸をはずませて兄弟姉妹が到着します。午前11時、外での開会行事は雨のため、やむなく宿舎の大広間で。参加者全員の自己紹介を終え、昼食を済ませて午後はクイズ・ラリーです。これは3～4人が1台の自動車を使って、地図で各チェックポイントを探しつつ、そこに関連のある質問に答えていくというものです。雨の降る南軽井沢の自然の中、皆、慣れない道に悪戦苦闘しながらも、難問、奇問に答えていました。

夜は長野支部担当のダンス・パーティー。姉妹たちのファッション・ショーや即席バンドも登場しました。盆提灯(!?)の照

明の中、民宿の古い体育館の中は外の雨音を跳ね返すような音楽が響きました。

2日目が、メインのグループ活動です。5つのグループに分かれた参加者は、各々が一番楽しめると思っているプログラムを行ないました。あいにくの小雨がパラつくような天気でしたが、みんな思い思いの軽井沢を満喫したと思います。夕食を兼ねたバーベキューをしながらの成果発表では、グループの個性が発揮され、いろいろなハプニングも公表されました。

この日は最後の夜とあってキャンプ・ファイヤーが計画されていたのですが、雨のために体育館で行なわれました。火に見立てたオレンジ色のバンダナを掲げての実行委員長・副実行委員長の入場の後、各グループの余興や、このプログラムを担当してくれた諏訪・松本両支部によるスキット、イントロ当て、バンド演奏……盛りだくさんの内容でした。会も終わりに近づき、「翼を下さい」をみんなで歌うときには肩を組み合い、アンコールまで……。まさに、この大会で実行委員会が目指していた「一つになること」が実現できたように思えまし

た。この余韻は醒めず、深夜まで語り合う人々の姿や、この夜で帰ってしまう人と別れを惜しむ光景もみられました。

最終日は6時から早朝セミナー。教会教育部の井木兄弟が大会テーマをより積極的なものとして、「輝こう!」ということでお話していただきました。自分を愛すること、神様を愛すること、そして人々を愛すること……。私たちが輝くために何が重要なのか、みんなが学んだに違いありません。

朝食後のセミナーIIには青柳前仙台伝道部長ご夫妻をお迎えし、「伝道」をテーマとしてお話を伺いました。神の御手を、さらにその御姿を見ることのできる貴重な機会ともいうべき伝道、そして私たち若人がなすべき事柄についてのご夫妻のお話と証に、一人一人が耳を傾けました。続く証会では、他のステーク部の方、求道者の方もこのカンファレンスで得たことを述べてくださいました。語る側も聞く側も、ともに目には涙が光っていました。思いと信仰の一致が感じられました。最後に実行委員の作詩・作曲によるテーマソング「輝きたいネ!」を全員で歌い、松沢第一副地方部長のお話で3日間の幕を閉じました。

多くの兄弟姉妹の働きがあって無事終わることのできた今回のカンファレンス。各自が自分の持つ光を輝かせたとき、そこに何を見たでしょう。「永遠の友達」か、それとも今、自分のなすべきことか……。答えはそれぞれ異なっているかもしれませんが、でも、最終ゴールはひとつ、それを改めて感じたカンファレンスでした。(レポーター:加藤ひろみ、長野地方部サマーカンファレンス実行委員)



賛美歌による 改宗

マージョリー・P・ヒンクレー

18 41年の秋、美しく晴れわたったある日曜日の朝のことです。当時まだ16歳だった私の曾祖父ウィリアム・ミンシャル・エバンスは、英国リバプールの街路をある教会へ向かって歩いていました。そのとき突然これまでに聞いたどの音楽よりも魅力的な歌声が聞こえてきたのです。歌声にひかれて狭い路地に入り、きしみをたてる階段を上がると、小さな部屋で二、三人の集会が開かれていました。その美しいテナーの持ち主は、

イエス様が 聞いておられる

ジーン・アーンストロム

後に教会の大管長になったジョン・テイラーでした。曾祖父ウィリアムは結局、説教を最後まで聞くことになったのです。

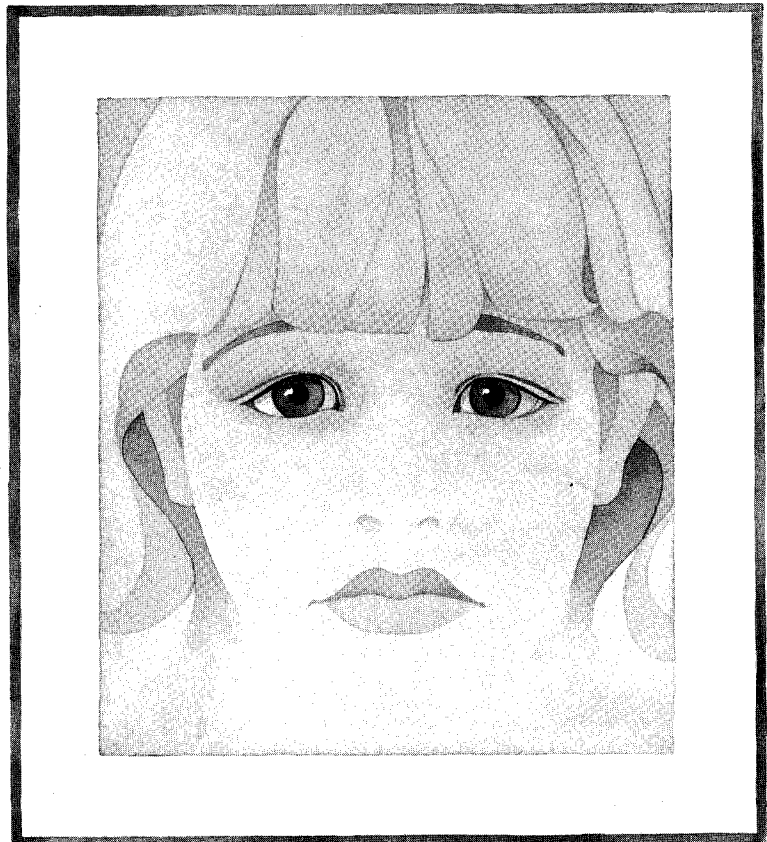
家に戻ると兄のデビッドから、聖歌隊の練習を休んだことを叱られました。理由を尋ねられたウィリアムは次のように答えました。「みんなも行けばよかったのに。ぼくが今日聞いてきたすばらしい真理をぜひみんなにも聞いてほしいんだ。」

ほどなくしてまずウィリアムとデビッドが改宗し、残りの家族を教会に導きました。1848年から50年にかけて3人の兄弟と両親がユタ州に移住することになりましたが、ウィリアムの母親はアイオワ州ケインズビルまで来て、コレラにかかり亡くなってしまいました。そのことでウィリアムの父親はひどく失望し、ユタまでたどり着く希望も失せ、そこから英国へ戻ってしまったのです。

ウィリアムとその兄弟たちは、当時の開拓者たちとまったく同じ苦難と試練を受けましたが、最後まで福音に忠実で、信仰を持ち続けたのです。ウィリアムは、12人の子供に恵まれ、子孫に大いなる遺産を残しました。

私は教会の賛美歌を口ずさむとき、このことをいつも思い出します。私たちの家族に福音の道が開かれ、それによって数々の祝福を享受することができるようになったきっかけは、曾祖父ウィリアムが聞いたまさにあの1曲の賛美歌だったのです。□

*マージョリー・P・ヒンクレー姉妹は、ヒンクレー第一副管長の妻であり、これまで先祖の記録探求の分野で熱心に働いてきた。



私 はあのときのことを決して忘れな
いと思います。9歳の障害を持つ
女の子のきらきらした青い瞳を通して、
みたまが示されたのです。

ヘザーはいつも楽しげに笑っている賢
い女の子です。障害のために行動がひど
く制限された肉体には、ひととき優れた
霊が宿っています。でも、どんな簡単そ
うに見える活動であっても、ヘザーにと
っては本当に大変なことでした。

ヘザーは話をするのができないため、
目を使って言いたいことを伝えます。じ
っと見つめたら「はい」という意味で、
一度まばたきしたら「いいえ」という意
味です。質問を受けたり、見つめたり、
まばたきしたり、笑ったり、様々な顔の
表情をしたりして、ヘザーはその熱意を
人々に伝え、自分の周囲にいる人にひとり
残らず喜びをもたらしてくれるのです。

数年にわたって医師として、また教師
としてかかわってきた経験から、ヘザー
にとっては天と地とを隔てる幕がかなり
薄いのではと感じたことが何度もありま
した。これは障害を持つ子供にはわりに
共通して言えることです。もしヘザーが
口をきいたら、霊にかかわることについ
て私にどんなことを教えてくれるのでし
ょうか。

ある月曜日の朝のこと、ヘザーと私は
週末の出来事について話し合っていました。
ヘザーは初等協会に出席したと教えて
くれたので、私は初等協会の歌を何曲
か歌ってあげました。自分のわかる歌が
あると、ヘザーの顔からは笑みがこぼれ
ます。私は自分の一番好きな曲を歌って
から、「何か大好きな曲があるかな」とヘ
ザーに尋ねてみました。するとヘザーは
すぐに私の目をじっとみつめるのです。
こうして私はヘザーの一番好きな歌を探
し出すという難題に立ち向かうはめにな
ってしまいました。

何度か質問を繰り返すうちに、ヘザー
の一番好きな歌というのが初等協会に聞
いたことのある曲だということがわかり
ました。しかしそれがどの歌の本にあっ
たのかはわかりません。それでも、その
歌がイエス様について歌った歌だという

ことはわかっていました。そこで、私は
思い出せる限りの歌を歌ってみました。
しかし、求める曲を探し出すことはでき
なかったのです。私はどうしてよいかわ
からず、ヘザーもすっかり失望してしま
いました。

ヘザーは私がやめようと言ってもやめ
させてくれません。何かの理由があつて、
何としても自分の大好きな曲を私に教え
ようとしているのです。結局、私が翌日
学校へ初等協会の歌集を持って行って、
それを一緒に全部歌ってみることになり
ました。

火曜日の朝、ヘザーはすぐにでもその
歌を探し出したいという意志を伝えてき
ました。こうして歌集を隅から隅まで歌
ってみたのですが、求める曲を探し出す
ことはできません。ヘザーはどの歌も皆
好きなのですが、求める曲はその中には
ありませんでした。絶望した私は、もし
その曲をお母さんが見つけてくれたら、
歌うことができるけれども、どうしても
見つめることができなかつたらあきらめ
ましょう、と言ったのです。

その翌日、ヘザーは前日にも増して、
何としてもその歌を見つめるという固い
決心をしていました。ヘザーの車椅子に
は教会の賛美歌集がくりつけられています。
私はヘザーの隣に座って、1ペ
ージずつめくりながら、賛美歌集をはじか
ら見ていきました。私が1曲ずつ1番の
歌詞だけ歌っていくと、ヘザーはそのた
びごとに「絶対にそれではない」と言わ
んばかりに目を閉じます。賛美歌集も半
ばまで行ったでしょうか。私は「心に光
あり……」と歌い始めました。

ヘザーはまるでだれかに針ででも刺さ
れたように、跳び上がってにっこりとほ
ほえみました。きらきらした瞳がまっす
ぐに私の方を見つめています。私たちは
一緒に笑いました。3日間にわたる大捜
索がやっとのことで終わったのです。「や
っとこれであなたの一番好きな歌を一緒
に歌えるわね。」私が1番を歌うと、ヘ
ザーもにっこりほほえみます。私がコー
ラスの部分を読み始めると、ヘザーも全力
を振りしぼって、ときどきため息のよう

な声を出して一緒に歌います。私がコー
ラスの部分を読み終えると、ヘザーはま
るで「私はその部分が好きな」と言わ
んばかりの表情でじっと私を見つめてい
ました。その歌を見つめることができた
ことを、私はどれほど感謝したことであ
りましょうか。私が2番から先も歌ってほ
しいかどうか尋ねると、「もちろん」という答
えです。私はもう一度歌い始めました。

「心にひびく歌
わが主にささぐ
歌えぬ歌をも
主はききたもう。……」
(讃美歌47番)

この歌詞にヘザーが強い反応を示した
ため、私はそこで一度歌うのをやめまし
た。私はヘザーを見て、このときこの歌
詞にどれほど重要な意味があるかが初め
てわかったのです。「ヘザー、あなたが
この歌を好きなのは、この歌詞のせいなの
と尋ねました。「あなたは私にこのことを
教えたかったのね。イエス様が聞いてい
らっしゃるって。歌えない歌も聞いてい
てくださるって。」ヘザーは頭を上げて、
私の目をじっと見えています。それはヘ
ザーの証でした。

みたまの導きを感じた私はこう尋ねま
した。「ヘザー、イエス様はあなたの心に
語りかけてくださるの。」ヘザーはじっと
見つめたままです。

ヘザーはみたまを本当に身近なもの
としていたのです。それを知った私は、も
うひとつ尋ねてみたいことがありました。
敬虔な思いと期待を込めて、私は小さな
声でこう聞きました。「ヘザー、イエス様
は何て言っておられるの。」ヘザーの清ら
かな瞳を見て、私の心臓は高鳴っていま
す。ヘザーは自分の心の思いを伝えよう
として私の問いかけを待っています。私
はこのとき主が確かに適切な問いを用意
してくださったのだと感じました。私は
大きく息をして、質問を続けました。「イ
エス様は、『ヘザー、おまえのことを愛し
ているよ』っておっしゃってるの。」ヘ
ザーは見つめたままです。その通りとい
う答えです。私は一息つくつと、意を決して
また尋ねました。「イエス様は、『ヘザー、

おまえはとても大切な人だよ』っておっしゃってるの。」また、その通りという答えです。私はもう一度一息つくと、感動に胸を震わせながらこう尋ねました。「イエス様は『ヘザー、がんばるのだよ。わたしはおまえのためにとてもすばらしいものを用意して待っているから』って言っておられるのね。」

ヘザーは頭を起こしました。まるで体の隅々まで電気のショックを受けたとき

のようです。ヘザーは私の心の奥の奥まで貫くような視線でじっと見つめていました。ヘザーは自分が愛されていることを知っていました。自分がかけがえのない存在だということを知っていました。とてもすばらしいものが待っているのだから、ただがんばり続けさえすればよいのだということを知っていたのです。

本当に神聖な時が過ぎていきました。それ以上の言葉は不要でした。私はヘザ

ーに顔を近づけると、ほおずりしました。言葉で言い表わせなくても、心に通じる澄んだ青い瞳は、真理を知っていたのです。

そうよ、ヘザー。イエス様は確かに聞いておられるのですよ。□

*言語病理学者であるジーン・アーンストロムは、ケイズビル・ユタ・クレストウッドステーク部のケイズビル第12ワード部の初等協会の教師をしている。



「高きに栄えて」

アルベルティナ・バン・デン・ヘーゼル・ホーゲルマン



幼いころ、オランダのミッドウォルダに住んでいた私は、毎週日曜日になると村の小さな福音教会に通っていました。私の両親は、教会にも行かなければ宗教を話題にするようなこともありませんでしたが、私はイエス・キリストについての牧師の美しい話を聞くのが大好きでした。神様は私にとって何とすばらしいお方に思えたことでしょう。しかし、万能であるがゆえに同時にあらゆる場所に存在し、また私の心の中に住めるほどの小さな存在でもあるという神様についての牧師の話が、私にはどうもよく理解できませんでした。

天父の真の姿を教えている歌に出会ったのは、私が17歳になってからでした。末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師と出会った私は、当時住んでいたアメルスフールトでの最初の家庭集會にフィアンセと一緒に出かけに行きました。そこで聞いた賛美歌「高きに栄えて」の歌詞が、私の人生を変えることになったのです。

高きに栄えて 住めるわが父
いつ、かえり行きて み顔を見るや
わが霊かつては みそばに住みて
幼きそのとき 育てられしか (讚美歌140番)

私にとってその歌と、そこに述べられている御父は忘れられない存在となりました。しかしフィアンセの父親から、宣教師に会うことをやめるように言われ、バプテスマは受けられませんでした。

それから3年後、結婚してロッテルダムに住むことになった私たちは、再び街頭伝道中の宣教師を見つけ、家でレッスンをしてくれるよう頼みました。こうして1928年9月、私は夫と共にバプテスマを受けました。バプテスマを受けたの帰り道、私は自分が世界一の幸せ者のように思えました。

その後の何年間かに、私たちはいろいろな困難に出会いました。しかしいずれの経験も、私たちに天父は偉大であり、私たち一人一人を気づかせてくださる愛のお方であることを教えてくれるものでした。

私たちの最初の子供が1歳のとき、非常に重い病気になり、医師から快復の見込みがほとんどないことを知らされました。苦しみ我が子を見守るそのつらい時期に、私は触れることができるほどに神を身近に感じました。私たちは神権

の力に非常に大きな確信を抱いていました。そのためか、私たちの娘は神権による祝福を受けて以来快復していったのです。

隠れ家の中であるいは爆弾の炸裂する中で、また寒さや飢えの中で夫と共に生き抜いたオランダでの第二次世界大戦の恐怖の中にあつたときでさえ、愛ある御父のみたまによって私たちは神に、また聖徒たちに近くあることができました。扶助協会の会長をしていたある日のこと、私は10歳の娘と一緒に独り住まいのスミス姉妹という年輩の姉妹を訪ねたことがありました。こじんまりした家に着くと、彼女は何かを熱心に読んでいました。話を聞くと、空腹に襲われたため霊の糧でおなかを満たそうと聖書を読み始めたというのです。

当時食べ物配給制で、私のポケットには、子供たちのためのパンひと切れ分の配給券が入っていました。私はおなかをすかせているスミス姉妹のことが非常に気になり、娘にその券を渡すと彼女のためにパンをもらってこさせました。帰り道、私はパンをあげてしまったことを、子供たちにどう話したらよいか迷ってしまいました。自分では正しいことをしたとわかっていましたが、子供たちの飢えをどうすればいいのでしょうか。

帰宅した私をその答えが待ち受けていました。ズオールに住む親戚が私あての手紙を甥に託してくれたのです。甥から受けとったその手紙の中には何と3枚のパン配給券が入っていました。

天父は長年にわたり、奇跡的な方法で私たちを祝福し続けてくださいました。1947年には、私たちの娘が伝道に召されました。お金はほとんどありませんでしたし、彼女が得ていた収入も失うことになりましたが、私たちは娘を助けることにしました。娘の伝道中ほど我が家が祝福されたことはありません。時折私に、自分の子供を伝道に出したいがお金がないのでできないと訴えてきた人もいました。そんなとき私はいつも、自分たちにもお金はないが、主の祝福があつて娘を毎月援助できることを話して聞かせました。

80年という人生を振り返ってみて思うのは、私にとって最大の特権は、自分が神の子供であり、神に近くあればこの世にある間導かれるということを知ったことです。私たちがふさわしくあれば、神は「高きにて」私たちを待ち受け、迎え入れてくださるのです。□

知恵の言葉

ダイアン・クライブ

自分の目標をすべて達成しようとして、私はこの世のプレッシャーに負け、さまざまな決断に迫られ、不安に圧倒されてしまいました。私はいつも夜遅くまで起きていて、食事を抜いては一度に何時間も働き続けるといったことをしていました。結局は、こうしたことすべてが私の精神に悪影響を与えることになったのです。私は挫折感にさいなまれ、自分の問題に対処できなくなってしまったのです。

そこで私は、万事がうまくいくという確信が得られることを期待して祈りました。ところが意に反して受けた答えは、「知恵の言葉を守りなさい」という静かな細い声でした。この答えに私は戸惑い、失望しました。なぜなら、私はたばこも吸わなければアルコールを口にすることもなく、お茶もコーヒーも飲んだことがなかったからです。知恵の言葉を守るようにというこの勧告がいったい私にどんな意味があるのでしょうか。

挫折感を味わい、仕事に自信が持てなくなったという友人たちの話をこれまで何度も聞いてきた私は、そのことに思いを巡らしてみました。彼らのほとんどは、そうした気持ちを克服し仕事を続けています。ところが自分に対して常に自信が

持てないでいる人々は、皆その人の持つ優先順位に問題があることに気づきました。彼らは自分のことをすべて後回しにしていたのです。規則正しく食事をとることも、午前零時前に床に就くこともほとんどありませんでした。いやおうなしに、私は彼らと同じ過ちを犯している自分を認めざるを得ませんでした。と同時に、私は自分の生活を変える必要があることに気づいたのです。

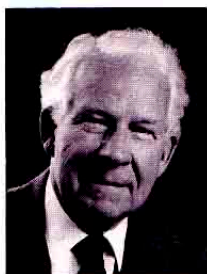
私はまずあまり重要でないものを選び、それから本当に重要なものに焦点をあててみました。そして早く眠くなるよう、早起きをするようにしたのです。また栄養のあるものを食べ、運動を続けたのです。こうした習慣を身につけていくにつれ、私はより良い計画を立てられるようになり、バランスのとれた生活ができるようになってきました。それまで心を煩わせてきた多くのことが、それほど問題ではなくなり、もっと自由に他のことに心を向けられるようになってきたのです。

私たちはまだよく歩けないうちに駆け出してしまうことがよくあります。私たちにとって必要なのは、大きな目標に到達する以前に神の最も基本的な戒めに従順かどうかを再度評価してみることでないかと私は思います。□





貧しきことは 楽しからず



十二使徒定員会会員
マービン・J・アシュトン

貧しいことは決して楽しいことではありません。そして、だれも貧しさを経験する必要などはないのです。私たちは祈りと行ないを通して、貧しい状態に陥らないよう神から助けを受けることができます。永遠の生命を持つ者は富める者です。

しかし、日々賢明な行動をとっていないと、私たちは真の貧しさの犠牲になりかねません。ここで問題になってくるのは、貧しいあるいは富めるということがどういうことかということです。それらは物質的な事柄についてだけ言うのでしょうか。そして次にだれもが考えなければならないのは、もし多額のお金や時間、人々に影響を及ぼす力、学歴などがある場合、それで何をするかということではなく、現在またはこれから先、手にするであろうそういった財産や資金をどのように役立てていったらよいかということです。

この記事は、私たちすべてが貧しい状態に陥らないよう援助することを目的として書かれています。私たちがすでに、私がここで定義している貧しい状態にあるとしたら、それは幸いにも克服できるということです。皆さんがもっとよく理解できるように、私は貧しい状態に陥らないために従うべき戒めをいくつか提示したいと思います。ほかにもたくさんあるでしょうが、私たちが意図していることに関しては、以下の戒めがふさわしいと思います。

汝、友を失うなかれ、友となる努力を怠るなかれ

友を少しずつ失っていく人は、貧しい人です。人は友をなくすと貧しくなります。私たちの親友が何らかの理由で私たちのもとを離れ、信用も信頼もされなくなると私たちは貧しくなります。友を失うと善を為そうとする熱意と力が往々にして私たちから失せていってしまいます。

私たちが友情を保つために必要な代価を進んで払わないために、友を失ってしまうことがよくあります。アメリカの詩人ラルフ・ウォルドー・エマソンはこのように言っています。「友を持つ唯一の方法は自分から友達になることである。」

友人のいない人は貧しい人ですが、それ以上に貧しくなるのは、友達になることをやめたときです。他の人々がどうであろうと、私たちは友達になるための地味な努力を怠ってはなりません。

汝、みずからの性格を尊び自滅せぬよう努めよ

性格が貪欲で不誠実だと、人は貧しくなります。またいろいろな圧力に耐えられなくなって良くない行動に走るときも、人は貧しくなります。仕事をうまく「切り抜けること」が「最善を尽くすこと」であると考えている人は貧しい人です。美徳、行動力、真理が人生の中でうまく調和したときに、人は富める者となるのです。

私たちの性格は、人生の試練にどう対処していくかによって決まってきます。勇気をもって堂々と真理と高潔さを守っている人々がいることを神に感謝してください。「彼女はどんな苦悩や問題に遭っても決して自分の信念を曲げない人です。」だれかにこのように言われたらどんなにすばらしいでしょう。

汝、欺くなかれ

悪魔の得意とする手段は、欺き^{あざむ}です。そうしたサタンの業が、「偽りの父」という呼び名を与えることになったのです。サタンは私たちすべてが偽りを是とする生活をするによって貧しい人間になることを望んでいるのです。偽りが奨励されるようなとき、そのようなことを促す人の失うものは計り知れません。そしてその人は、自分が傷つけた人々に対して責任を負わなければならないのです。いい加減な人物は、わずかな真実を語ることによってたくさんの利益を得ようと考えますが、人格者は、何が正しいかを考えるものです。

汝、みずからの信念を曲げることなかれ

私たちは常に、人格とは徳に相応するものであることを忘れてはなりません。継続して真理を分かち合い、励まし合うことによって、私たちは貧しい状態から守られます。徳高い標準を掲げて生活している人は、どんな状況にしようと自分の信念を曲げることはしません。

自分の信念を容易に曲げない人は決して貧しい人になることはありません。ふさわしい原則にそって生活する人々

は、富める人です。

汝、己を愛せよ

敗北の最悪のパターンは、自分自身に負けることです。敗北は決して喜ばしいものではありませんが、自滅ほど痛々しくまた破壊的なものはほかにありません。威厳と自尊心を失うことは最も貧しいことです。友人や自分が信頼できなくなるということは、人生において信頼できるものがまったくないことと同じです。

希望よりも絶望を優先させる人は、貧しい人です。自分が何者であるかを思い起こすことができず、神や家族、自分自身との関係を忘れるとき、人は貧しい者となります。私たちは天の御父の霊の子供であり、天父の助けによって何事をも為し遂げることができるのです。

汝、正直なれ

正直を人生の踏むべき道としてではなく、単なる押しつけられた決まりだと考えている人は貧しい人です。明らかな良心は大いに価値があります。「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。」(マルコ 8:36) この何年間か、皆さんは愛されるよりも信頼されることの方がどんなにすばらしいかということを何度も耳にしてきたことでしょうか。正直さに欠けるということは、建物を建てるための土台がないのと同じことです。

汝、己の利益のために、人を不当に利用するなかれ

価値のはっきりしない物売り込むために、個人や団体

威厳と自尊心を失うことは最も貧しいことです。友人や自分が信頼できなくなるといふことは、人生において信頼できるものがまったくないことと同じです。

の名前を使う人は貧しい人です。投資の機会を、政治や教会とのかかわりを理由に「有利性」をうたって私たちに信じこませようとする人々は、何とずる賢い貧しい人々でしょう。だますことを意図して伝えられる言葉は皆不正直です。

わかっているながら何らかの形で不正直な行ないをしている人々は、貧しさに向かって歩んでいる人です。

汝、悔い改めは単に口にするだけで良しとするなかれ

悔い改めが単に口で言うだけのものではなく、プロセスであることに気づかない人は貧しい人です。人はだれでも自分自身の十字架を認識し背負わなければなりません。悔い改めには、行動が伴わなければならないのです。

悔い改めを進んでする人は、受けた物以上に負債を負うことはありません。悔い改めは私たちを落ちた状態から立ち直らせてくれます。しぶしぶ行なったり、正しく理解しようとしなない人は貧しくなります。悔い改めとは、自分の生活を変えることを単に公言することではありません。それは、より良い生活をし、罪を捨てることを意味するのです。悔い改めとは、公的にも個人的にも行動に移すことなのです。

汝、金銭に支配されることなかれ

自分でお金を管理できず、お金に左右されてしまう人は貧しい人です。毎週あるいは毎月の生活費がたとえ十分であろうと足りなかりょうと、私たちは上手にやりくりして生活していかなければなりません。予算を立て、その範囲内で生活していくのです。

私たちの生活には、経済的困難を招く緊急事態や危機が必ず起こってきます。たとえそのような事態になっても、私たちは貧しくなることはありません。経済的災難は、為すべきことを心得ていれば避けることができます。心にかけてくれる友人、家族、隣人、監督、ステーキ部長のいる人はだれでも富める人です。

金銭を正しく賢明に利用するようにすれば、仕事や教育、責任を通して、私たちは個人的な満足を得ることができません。金銭面で成功を収めた人は、その手段が正しい場合、また得たものを正しく利用する方法を心得ている場合は何らやましさを感^{あが}じる必要はありません。お金や富が私たちの目標となり、崇める対象となった場合にのみ心が貧しくなるのです。

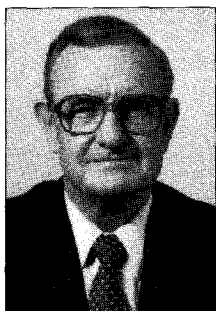
個人的に言って私は、この世で立派に財を築きあげてきた人を大変尊敬しています。ただし、その財産が正しく用いられることははっきりしているときに限ります。人生における最大の教訓のひとつは、何を持つかということより、持てるもので何をするかということの方がはるかに重要であることを知ることです。私たちは太陽の価値を高さではなく、その影響力ではかります。友人、美徳、人格、真理、高潔、悔い改め、そして神より与えられたほかの数々の賜を身につけてこそ、私たちは高価なる真珠を求めることができるのです。貧しいことは決して楽しいことではありません。幸いなことに、私たちはだれもそうなることを求められてはいないのです。□

*この記事は、ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学の説教を編集したものです。

質 疑 応 答

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、
教会の教養を公式に宣言するものではありません。

貧困者の多い国々でよく物乞いをしてくる人々に会います。キリストは貧しい人々に手を差し伸べるようにと教えておられますが、そのような人々に物を与えることは本人のためにならないのではないかと思います。迷ってしまいます。どのようなときに施しをするのがよいのでしょうか。



回答者

ジョン・F・オドナル

(グアテマラシティー神殿神殿長)

貧しい人の多い国々を旅したり、そういった国々に長年住んでみて、私自身も、困っている人々に施しをするようにという聖典の教えにぶつかり、考えさせられてきました。物乞いをしてくる人々の中には、実際に病気や貧困のためにどうしても援助の必要な人がいることは確かです。しかし中には特定のグループに属し、お金を払ってまでも有利な場所を占有して、物乞いをしている者もいるのです。

そのような人にとって物乞いは生計の手段となっており、彼らは、旅行者や新しく越してきた人々の同情心をう

まく利用して、たちまち収入を得てしまうのです。そういった人々に施しをすれば、多くの場合犯罪につながったり、自立には何の役にも立たない彼らのそうした行動を奨励し、継続させてしまうこととなります。物乞いをしてくる人々に施しをしたからといって、必ずしも彼らを助けることにはなりません。むしろ主が望まれるのは、彼らに自分で生計を立て、自立していくことを教えることなのです。

では、彼らに自立を教えることと、金持ちの若者に勧告された次の救い主の言葉はどう関連づけていけばよいのでしょうか。救い主はこう言っておられます。「持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。」(マルコ10：17-22, ルカ18：18-23参照) またこのようにも言っておられます。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25：40)

これは、世界中で人口が増加し、経済状態が悪化し、物乞いをする者の数が増えていくにつれ、私たちがいずれは直面する重要な問題です。旧約聖書ではこのように教えています。「貧しい者はいつまでも国のうちに絶えることがない。」(申命15：11)

どの時代にあっても、教会は貧者や困窮者のために多くの助けを与えてきました。旧約時代に、イスラエルの民は次のような勧告を受けました。「あなたの神、主が賜わる地で、もしあなたの兄弟で貧しい者がひとりでも、町の内におるならば、その貧しい兄弟にむかって、心をかたくなにしてはならない。また手を閉じてはならない。必ず彼に手を開いて、その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない。」(申命15：7-8)

また高価なる真珠には、エノクの町の人々は「心を一にし、精神を一にし、義に住みたれば……彼らの中に貧しき者一人もなかりき」(モーセ7：18)と記されています。

モルモン経には、民に向かって述べたベンジャミン王の言葉が次のように記されています。「お前たちは、お前たちの助けが要る者を自分たちで助け、貧しい者に自分の持物を施し、物もらいがお前たちに乞いねがうのを拒んだり、これを追いはらって死なせるようなことをしないでであらう。」(モーサヤ4:16)

またベンジャミン王は私たちに、助けの必要な人々を裁くことがないようにと勧めています。「おそらくお前たちは『この者は自分自身でこのみじめな有様を招いたのであるから、私はかれを助けるのを止め、その苦しみを救うために私の食物を与えず、また私の持物も分けてやらない。その苦しきは当然の罰であるからである』と言うであろうが、私はお前たちに告げる。このようなことをする者は誰でも大いに悔い改める必要がある……ねがわくは、私がお前たちが一人一人みなその財産の多い少ないに応じてそれを貧しい人々に分け与えることを望む。それはたとえば、腹のすいている者に食物を与え、はだかである者に着物を着せ、病んでいる者を見舞い、各々の必要に従って肉体についても霊についても救助を施すことである。」(モーサヤ4:17-18, 26参照)

この神権時代においても、主は教会が回復されて間もなく予言者ジョセフ・スミスに次のように指示しておられます。「汝ら貧しき者のことを思い起し、彼らに与えざるべからざる扶助のために……己が財物を神に奉献せよ……汝らの財物を貧しき者に分ち与うれば汝らこれをわれに為すなり。」(教義と聖約42:30-31)

主は、聖徒らの「財物」は「教会の監督とその副監督なる二人の長老、または監督が聖職に任命せんと(する)大祭司らの前に捧げ」(教義と聖約42:31)るべきであると教えておられます。また主は、予言者ジョセフに「汝ら貧しき者、乏しき者を訪れて救いを施さざるべからず」(教義と聖約44:6)と命じておられます。

現在教会には、福祉プログラムと断食献金という会員たちを(状況によっては緊急事態にある人々や障害のある人々、失業者などの非会員をも)救済する制度が設けられています。私たちは惜しみなく断食献金をし、福祉プログラムに労働を提供することにより、文字通り貧しい者たちに「救いを施す」ことになるのです。主を愛し主に従いたいと思っている人々は、指導者たちからもっと多くの施しを要請されれば、心からそれにこたえるはずで、もちろん大きな犠牲が伴うかも知れませんが、しかしそうすることによって、必ず大きな喜びが得られるのです。

教会は組織として、大々的に貧困者に救済の手を差し伸べています。では、私たちに個人的に施しを求めてくる人々に対してはどうでしょうか。本当に困っている人々と、物乞いを専門の仕事にしている人々、また世界中で見受けられる、自活できるにもかかわらず施しを求めてくる人々は何のようにして見分ければよいのでしょうか。聖典からまた私の経験から言わせていただくなら、施しというのは、一人一人が自分で決めるとごく個人的な事柄であるということです。ただ私たちの出会う貧困者すべてを援助しきれないという点はその決断をむずかしくさせているのです。たいいていの旅行者は、大勢の物乞いをしてくる人々にとり巻かれ、金額はわずかであっても彼らすべてに分け与えることが困難な状況に追い込まれた経験をしているはずで、そういう場合には、自分のなすことすべてに知恵を求める日々の祈りが導き手となり、私たちにいつだれに施しをしたらよいかをみたまのささやきを通して知らせてくれるはずで、

そうしたみたまの導きによって、私たちはいつ施しをしたらよいかを知り、使徒パウロが言っているように「惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく……」施しをするようになるのです。なぜなら「神は喜んで施す人を愛して下さる」(IIコリント9:7)からです。□

子供から 大人の世界へ

デビッド・C・ルイス



高さ30メートルのその崖の上から下を見たときには、足がすくみ、全身が硬直してしまいました。なぜそんな所に行ってしまったのか、自分でも信じられない気持ちでした。ボートから様子を見ていた友達は、私が飛び降りるのをためらっているのを見てさかんに笑っていました。それは私の負けん気をひどく刺激しました。

私たちは高校卒業を記念して、近くに湖をひかえた避暑地でキャンプをしていたのです。そこはとても美しい所でした。健康な体を持ち、太陽の光の中でとびまわる18歳の若者たちには、すべて楽しく感じられることばかりでした。

私たちは崖の上に来ると、下の方でボートに乗って待っている仲間たちを、いくじなしとひやかして笑ってやりました。彼らはいつも「今度はこういう冒険をしよう」などと話すだけで、実際には一度も行動に移した試しがなく、学校でも、決して「危ない」ことには手を出しませんでした。このときも同じで、彼らには崖から美しい湖水の中に飛び込む勇氣はありませんでした。

最初に飛び込んだのは、ブライスでした。彼の体は一瞬間宙に舞ったかと思うと、ざぶんと水しぶきをあげて湖の中に姿を消しました。ブライスは水面に顔を出すと、ボートにつかまりながら、「デビッド、今度は君の番だ」と私に声をかけてきました。

一緒に崖の上に来たほかの3人は、私の顔を見てにやにやと笑っていました。「とんでもないことになってしまった」という思いが胸をよぎると同時に、胃がきりきりと痛みました。しかし今さら引きさがるわけにもいきませんでした。みんなが今や遅しと、私が飛び降りるのを待ち構えていたのです。もしそこで引きさがってしまったら、いつまでもみんなの笑い者にされることはわかりきっていたからです。

私が飛び込もうと腹をきめたそのとき、ケリーが大声をあげながら、湖めがけて飛び込みました。ところがケリーは膝を強く打ったらしく、水面にあがってくると泣き声をあげていました。結局、ケリーはあとで両膝の手術を受けることになり、秋が来るまでギプスのやっかいになったのです。

私たち残った3人はケリーのその姿を見て、足ががくがくと震えていましたが、今さら怖いなど言うことはとてもプライドが許しませんでした。そのとき、私は頭の中に、ブリガム・ヤング大学への入学や、その1年後には伝道に出るという以前からの計画を思い浮かべ、「もしここで大けがでもしたら、どういうことになるのだろうか。友達に良く思われることは、そんなに大切なのだろうか」と考え込んでしまいました。

「成功か失敗かは5分5分の確率だ」とブライスが下から私をせかせかせました。「5分5分の確率」という彼の言葉は気持ちのいいものではありませんでした。

それでも私は、助走をして勢いをつけてから、宙に身を躍らせました。

自分の体がものすごい勢いで水面を打ったとき、背中に鈍い痛みを感じました。水中に沈んでから、私は自分の体を思うように動かせないことに気づきました。水面に向けてゆっくりと浮かんでいく間は、肺が破裂してしまうのではないかと思えるほどの苦しさでした。

最初、仲間たちは私の苦しそうな顔を見て笑っていました。しかしテッドがすぐに様子がおかしいことに気づいて、みんなを黙らせ、私の体をボートに引き上げました。膝を痛めたケリーの横に寝かされた私は、背中の痛みについて二言三言何か言いましたが、すぐに口も利けないほどの激しい苦しみに襲われてしまいました。

ケリーと私は、崖の上のふたりが、自分たちがひどい有様になったのを目の当りにしたばかりなのに、それでもまだ飛び込むつもりでいる様子を見て、一体何を考えているのかとただあきれるばかりでした。結局彼らは危険をかえりみずに、飛び降りましたが、幸いにして、けがをせずすみしました。

医師のいる町までは200キロもあると聞かされて、私はみんなと一緒に残り、最後までキャンプを続けました。私は自分の愚かさやうんざりしながら、2日間テントの中で寝たきりの生活をしていました。わずかに18歳のまだ何もわかっていない未熟な人間が、一時の楽しみや友達への見栄だけで、自分の命を賭けるようなことをしてしまったのです。

医師の見立てでは、背骨がかなり痛められていて、生涯関節炎に悩まされることになるという話でした。それでも私は、その程度ですんで自分は世界一幸運な人間だと考えていました。

私は、それまでの自分の人生をふりかえてみて、十代のほとんどの時期を、愚かで無責任な行ないに費していたことを思い知らされました。30メートルもある崖から飛び降りるという無茶もそのひとつに過ぎませんでした。そういった行ないが、自分自身や周囲の人々にどのような影響を与えるかということ、全く考えようとしなかったのです。つかの間のスリルを追い求めるだけの生活を続け、友達への見栄のために命を失いかけたあの日まで、愚かな行ないがもたらす結果について考えたことは一度もありませんでした。しかし、あの出来事を境に、それまでの子供じみたものの考え方を捨てて、自分の行ないに責任を持つ大人の考え方ができるようになったのです。□

応援団

七十人第一定員会会員
ポール・H・ダン

少し前のことです。私がひいきにしているライオンズというサッカーチームの試合を見に行きました。相手はピューマーズという今シーズン不調のチームで、この試合はライオンズが勝つだろうと思われていました。両チームは今シーズンすでに一度対戦していましたが、そのときもピューマーズの惨敗でした。観衆はほぼ半数ずつ両チームを応援していましたが、ピューマーズが勝つだろうとはだれも予想していませんでした。ところが、試合中に事故が起こりふたりの選手がけがをすると、観衆がみんな反ライオンズにまわってしまったのです。1万5千人以上の観衆がピューマーズを応援し、結果としてピューマーズが勝利を手に入れました。

人生においても、応援団があるとなしとでは、まったく違った結果が表われます。プロのスポーツ競技では地元のチームの方が成績が良いといえます。ブラジルのあるサッカーチームは、ホームグラウンドではほとんど負けたことがないそうです。どうしてかですって？そのマラカスタジアムというところにはいつも22万人以上の熱心なファンが地元のチームの応援に来ているからです。

日々の生活の中で落胆しかかったときに、そのような応援団がいてくれたらどんなに励まされることでしょう。それだけでなく、皆さんが自分の人生において勝利を得て栄光のうちに輝くか、それとも敗北を喫して打ちひしがれるか、そのことがほかのだれかに重大な影響を与えると知ったらどんな気持ちになりますか？

皆さんに知っていただきたいのは、私たちのだれもがそれぞれに応援団を持っているということです。目に見える応援団もあればそうでないものもあります。そしていずれも私たちの成功を願っています。そのような応援団が本当にいるのか疑いたくなることもあるでしょう。でもそれは本当にあるのです。目に見える応援団としては、両親、子供たち、兄弟姉妹、親類、教師、友人たちがいます。さらに、目には見えなくても私たちのことを心配し声援を送ってくれている応援団もいるのです。天の父母、すでにこの世を去った人々、そしてこれからこの地上に生まれてこよ

うとしている霊たち。彼らも皆、私たちが成功することを望んでいます。

この地上で、そしてこの世を去って幕の彼方へ行っても、私たちを応援し続けてくれる人々がいます。私はそのことをはっきりと知っています。皆さんが自分は独りぼっちだと感じるときでさえ、彼らは応援してくれているのです。私の友人のひとりに、高校・大学を卒業したあと、結婚し小さな家庭を築いた人がいます。あるとき、まったく見ず知らずの人が尋ねて来て彼にこう言ったそうです。「私があなたのファンのひとりであることを知ってもらいたかったのです。私はいつもあなたのあとを追いかけて、あなたの生き方に倣うよう努力してきました。」

私たちがそれと気づいていないときでも、私たちのことを心配してくれている人がいます。いったいどれほど多くの親がその子供たちのためにひそかに祈りを捧げているのでしょうか。その逆に、どれほど多くの子供たちが両親のために祈っているのでしょうか。何かの問題で困っているときに、ひそかに声援を送ってくれている友人たちがどのくらいいるのでしょうか。とても数え切れないくらい多いでしょう。しかし、実はもっと良い方法があるのです。それは、ひそかに声援を送るだけでなく、直接声をかけて励ましてあげることです。私たちが関心を持っているということを周りの人々に伝えてください。

皆さんの中には、自分はひそかであろうがなんであろうが声援などは受けたことがない、と感じている人が少なからずいると思います。そのような方々に特にお伝えしたいことがあります。それは、「いと高きところ」からも声援が送られているということです。天父は私たちを造り、愛してくださいました。ほかのだれよりも私たちの義しい成功を望んでいらっしゃる。そしてやがては、愛する息子、娘たちがみもとへ無事帰りつくことも。

だれからも助けてもらえないと感じるときでも、天父に頼り助けを求めることはできます。いにしへのダビデに天父が語られたことは、今日の私たちにも当てはまります。

「主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。主を待ち望め。」(詩篇27:14)

義しいことを行なおうとしているすべての人に対して、天父はまた次のような約束をしてくださいました。

「そは、われ汝らの前に先立ちて行くべければなり。われは汝らの右に在り、また左に在らん。わが『みたま』は汝らの心の中に在り、またわが天使らは



汝らを囲みて懐き支えん。」(教義と聖約84：88)

これらの偉大な約束を心に留めるならば、かつてモーセ

が語ったように「主はわたしの力また歌、わたしの救となられた、彼こそわたしの神」(出エジプト15：2)と言える日が必ずやって来るでし

よう。天父は決して約束をたがえられないからです。

愛する両親、友人、そのほかの人々もいつか

は死を迎えます。しかし彼らはこの世での働きを終えたあとも、依然として残された私たちのために働いてくれているのです。いったい、この地上での生涯を終えた両親が、もう子供たちのことを心配しなくなるなどということがあるのでしょうか。死んでしまったらそれでもう友人でなくなるということがあるのでしょうか。そのような関係は死によって途切れてしまうものなのでしょうか。決してそのようなことはありません。生命は永遠に続くものだからです。

まだ地上に生まれてきていない霊たちはどうでしょうか。彼らは私たちの成功に関心を抱いていないのでしょうか。これから皆さんのところへ生まれて来る子供たちは霊界から大きな関心を持って皆さんを見守っています。彼らは自分自身のためにもまた皆さんのためにも最も良い状態を望んでいます。そのことをよく覚えていてください。おそらく何百万という霊たちが、彼らを迎える準備をしている何百万という人々に、一生懸命声援を送っています。それは真実です。

皆さんにこのことをはっきりと知っていただきたいと思います。この世に生まれたすべての人々に応援団がついています。それは私たちの周りにいる人々、すでにこの世を去った人々、そしてまだ霊界にとどまっている人々から成っています。

そして何よりもその応援団の中には、私たちをこの地上に送り、私たちが再び無事に帰ってくることを願っている天の父がおられることを証します。ほかにだれの助けも得られないときでも、天父の助けだけで私たちは天父のみもとに戻ることができるのです。私たちが天父に近づくことによってそのことをさらにはっきり知ることができるよう、またその確信を周りの人々、特に自分の家族と分かち合うことができるように願っています。天父は生きていらっしゃる。私たちが愛してくださっています。天父とほかの多くの人々とともに私たちは再び天父のみもとに帰ることができるのです。このことを証します。皆さんの上に聖霊の導きがあり、これらのことを確かに知ることができる

よう心から願っています。□



それは私の特権です

A・リン・スコースビー

とても印象的な聖餐会で、私はこの福音の普遍性を痛感しました。聖餐は、フランス語とドイツ語で祝福され、話はイタリア語、英語、ポルトガル語で話され、『神の子です』の1節が日本、韓国、ドイツ、スペイン、イタリア、フランス、トンガ、サモア、オランダ、英国の各国語で歌われました。参加したすべての人々が、心に語りかける霊の言葉によって感動したのです。

そのときには、とても特別なことのように感じましたが、ユタ州プロボにある宣教師訓練センター（MTC）の所長に召された私は、このような聖餐会にもだいたい慣れたように思います。この責任が、かけがえのない経験となるであろうことがよくわかりました。

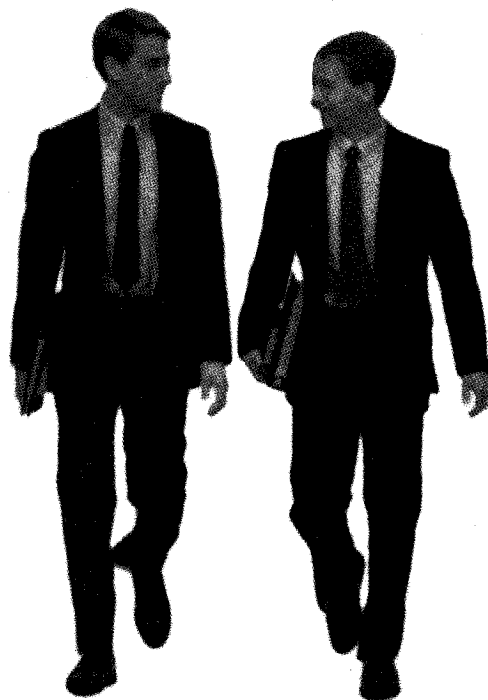
MTCの宣教師はいろいろな国から来ていました。あるときなどは、救い主に対する愛と証を分かち合うという共通の目的を携えて、宣教師たちが18カ国から集まって来たこともあります。

多くの国々から来た宣教師たちを目にし、彼らと面接し、助けようとするときの感動は、私がMTCの所長として召されている間、ずっと続きました。とりわけ、宣教師個人のことを知る機会を得たことは特権だと思います。彼らの経験からいろいろ学ぶことができましたし、霊的に成長していく姿を見守ることはすばらしい祝福で、彼らについて考え、語るとき、私はその祝福に圧倒され、涙を禁じえないことが今でもあります。

宣教師と面接をして、彼らの話を聞くと、その宣教師の霊的成熟度、準備の度合い、献身などについて知ることができ、いろいろな宣教師がいることを知りました。ある宣教師はよく準備ができていましたが、そうでない宣教師もいました。ある人は霊的に成熟しており、またある人はまったく霊的な心を持ち合わせていない場合もありました。自分の召しに対して非常に献身的な人もいれば、さほどでない人もいました。彼らの口から聞かれたのは、「犠牲」と「特権」という言葉でした。

言葉と行ないの一致

私は、どの宣教師も、伝道の召しについて自分の気持ちを表現するのに、この「犠牲」と「特権」というふたつの言葉のうちのどちらか、ときには両方を使うことがあることに気がつきました。ある宣教師たちは、主に仕える代わ



りに2年間の自分の生活、財産、ガールフレンドなどを犠牲にすることができて幸せだ、と言いました。ほかの宣教師たちは、主に仕えることができるのは特権であると言います。あまりこの言葉をよく聞くので、私は、宣教師たちがその言葉をどのように行ないに表わしているか気をつけて見るようになりました。

ドイツから来たある長老は、自分が「真理を知らない」ことをどんなに「意識して」いたか話してくれました。彼は、真理を見いだすために、どれほど「神に祈った」ことか、と言っていました。兵役を終えて、彼はスイスで職に就きました。ある日、独り暮らしの孤独感にさいなまれながら祈りました。「神様、どうぞ真理をお教えてください」と。数日後、街を歩いていると、ひとりの見知らぬ人が、こう話しかけてきました。「失礼ですが、お話ししなければいけないと思ったんです。なぜなのかわからないのですが。」その宣教師の言葉によると「彼の顔を見て気がついたんです。彼には神のみたまがありました。彼の顔は輝いていました。」その見知らぬ人は、教会の会員であり、その

同じ混み合った街を歩いていて、見たこともない若者に声をかけるように導きを受けたのでした。この新しい長老は、伝道の召しを特権であると言いました。

スペインから来たある姉妹は、すでに専任の伝道を終え、再び伝道に赴くための資金を得るため、看護婦の仕事に就きました。初め地元の指導者たちは彼女に2度目の伝道の許可を与えてくれませんでした。彼女は指導者たちが同意してくれるまでその意志を貫きました。そして彼女はチリに召されました。

メキシコから来たひとりの長老は、うれしそうに家族の写真を見せて言いました。「見てください。お父さんは、この靴を買ってくれるために2カ月も節約したんです。このスーツのために支部の人たちがお金を出し合ってくれたんです。」

この姉妹も長老も、伝道の召しを特権であると言いました。

サモアからひとりの長老が着きました。初めての自己紹介のとき、彼はみんなの前に行き、1冊のモルモン経をかざしてこう言いました。「この本が真実であるので私はここにいます。」伝道に発つとき彼の父は、15人兄弟のひとりである彼に、これから数年間は教会の指導者がお前の父親になるのだと話して聞かせました。彼は、伝道は偉大な特権であると考えていました。

別の宣教師は、フランスで福音を知ったことを話してくれました。彼の出会った宣教師たちは、フランス語をあまり上手に話せませんでした。語っていることが大切なことであるとわかったため、彼はその宣教師たちの教えをもっと理解できるように英語を学びました。レッスンを聞いた後、彼は今までの悪い習慣をやめるという難題に突き当たり、それを知った宣教師たちは、主に助けを求めようとして助言しました。ある夜、大きな悩みを抱えた彼は、宣教師たちに言われた通り、助けを求めて祈りました。1時間、あるいは2時間経ったでしょうか。戸を叩く音がしました。宣教師たちがやって来たのです。激しい風雨の中、5キロもの道をずぶ濡れになって歩いて来たのでした。「どうしたんですか」と聞くと、彼らはこう答えたのです。「私たちは寝ていました。でもあなたが、私たちの助けを必要としていると思ったので、起きて来たのです。」

ここまで話すと、彼は話を中断して、だれかを探そうにみんなを見渡しました。それから愛と感謝に震える声で話を続けました。「私は皆さんに、私を導いてくれた宣教師たちに出会っていただきたいと思います。」その宣教師たちは、ふたりともMTCの近くに住んでいました。彼は、その集會に、ふたりを招待していたのです。彼は、自分の伝道の特権であると話してくれました。

ひとりの長老は、ベトナムからワシントン州シアトルの難民キャンプに辿り着いた旅のことを話してくれました。

アメリカに住むことを目指して英語を学んでいるとき、だれかが写真と住所の入った小さなカードをくれました。なぜかわかりませんでした。彼はそのカードを大切にしまっておきました。その後難民キャンプに辿り着き、どこに住みたいかと聞かれた彼はそのカードを役人に見せました。役人は「そこには行けないが、その近くならばいいでしょう。」と言い、彼をソルトレークシティの末日聖徒の家庭に送ってくれたのです。そこで、彼は教会のことを学びました。話の終わりに、彼は難民キャンプでもらったカードを見せてくれました。それはMTCの写真だったのです。「所長、私は今ここにいます。」彼はこう言いました。他の宣教師と同じように、彼も伝道に出られることは特権である、と考えていました。

奉仕する特権

伝道により主に仕える特権は、色々な方法で感じ、また知ることができます。ある宣教師は、子供のころから家族の問題で苦しんできました。小さいときから家を出され、別の家族と住まなければなりませんでした。その彼を養ってくれた家族が教会を紹介してくれたのです。福音は、生みの親が与えてくれなかった人生の指針を彼に与えたのでした。

数年後、大学のフットボールのレギュラーになってから、彼は伝道に出ようと決心しました。伝道に就く前に、彼はモルモン経を大勢の人に配って歩きました。その中には、コーチや先生、仲間の選手などいました。こうして彼は宣教師訓練センターに入るまでに200冊以上のモルモン経を配ったのです。

伝道を単に犠牲と受け取っている宣教師たちの中にも、忠実に主の務めに献身している人々をよく見かけます。しかしながら、彼らは個人的な啓示や靈感というものを経験していないことに私は気がつきました。大抵の場合、彼らは救い主について、よく教えられていませんでした。しかし、聖典を学び、主をもっとよく知るようになるにしたがって、彼らの心は和らげられ、強められていきました。彼らは、主の愛をもっと深く感じるができるようになり、宣教師の業によって、この愛がほかの人々に広められていくことを理解できるようになったのです。

こうして入ってきたときには犠牲について話していた人々の多くが、宣教師訓練センターを出るときには、特権について語るようになりました。

MTCでの最後の証會で、ほかの宣教師たちより年配のひとりの長老が立ちました。彼は、英語がよく話せないことを詫言、深みのある力強い声で、ポーランドのクラブで育った、と話しました。彼は、家族の集っている教会に対してよい気持ちを感じることができず、本能的にその教会の礼拝の方法が間違っていることを悟りました。彼は、

教会に行くのをやめ、その代わりに聖書を勉強し始めました。成長するにしたがって、彼は政府に対する不満を募らせ、18歳のときにオーストリアへ亡命しました。彼は、新しい人生を求めて家庭を離れたのです。合衆国への移住の許可を待ちながらウィーン近くの難民キャンプでつらい9カ月を過ごしました。合衆国に着いたとき、いろいろな教会の宣教師が彼に語りかけてきました。彼はこう言っています。「彼らは親切でした。でも、彼らが私の求めているものに答えられないことははっきりとわかっていました。」ある日、末日聖徒についてのテレビ番組を見て、とても良い印象を持ち、もっとこの教会について学んでみようと思いました。こうして宣教師に会い、福音を学び、受け入れたのです。そして25歳になり、伝道に出ました。彼は、その深みのあるポーランド風のなまりで、静かにこう言いました。「ここにいる、ということは特権です。私は、長い間探し求めてきました。」

主に仕えることは、だれにとってもすばらしい特権なのです。教会の偉大な伝道の業に関与できるということは特権なのです。私は、安逸な生活を送っている若者、あるいは主を知らない若者、あるいは恐れを抱いている若者、あるいはなおざりにされている若者に思いを馳せています。彼らが永遠の生命に至る言葉を学ぶ特権を、全人類の贖い主について学ぶ特権を、また、彼らの同胞に奉仕することにより主に仕える機会を得るといふ特権を理解できるようになってもらいたいと願っています。□





「どうもありがとうございます、伝道部長。あした、そちらへ行きます。」

なんて素晴らしい伝道部長なんだろうと思いつつながら、私は受話器を置きました。それはミシシッピ・ジャクソン伝道部の伝道部長からの電話で、私にルイジアナのボジャー・シティー地区で2週間働くようにとの召しを伝えるものでした。私は、伝道がどんなものかよく知る素晴らしい機会だと、嬉しい気持ちで一杯でした。

そのあとは、荷造りをしたり、2週間の間に経験すると思われる事柄をあれこれ考え、それについて祈り、心がまえをすることで、丸一日が過ぎていきました。私は、一緒に働くアボット長老とワトキンス長老のために良い助けができるようにと祈りました。

瞬^{また}く間に土曜日が出て、私はボジャー・シティーまで家族に自動車送ってもらいました。そこで昼食をしてから、長老たちに電話をしました。ふたりの宣教師が来るまでの時間はわずかに十数分でしたが、とても長く感じられました。やがて、自分よりわずか2、3歳年上のふたりの長老が伝道部の車でやってきました。私はどうしていいかまったくわかりませんでしたが、おずおずとアボット長老に自己紹介をしました。そのとき感じたのは、「なんて霊的な人だ。自分はこんな素晴らしい人に一体どんな助けができるというんだろう。自分のような者がはたして必要なのだろうか」という思いでした。

そして、ワトキンス長老とあいさつをしてからも、その思いはますます強くなるばかりでした。

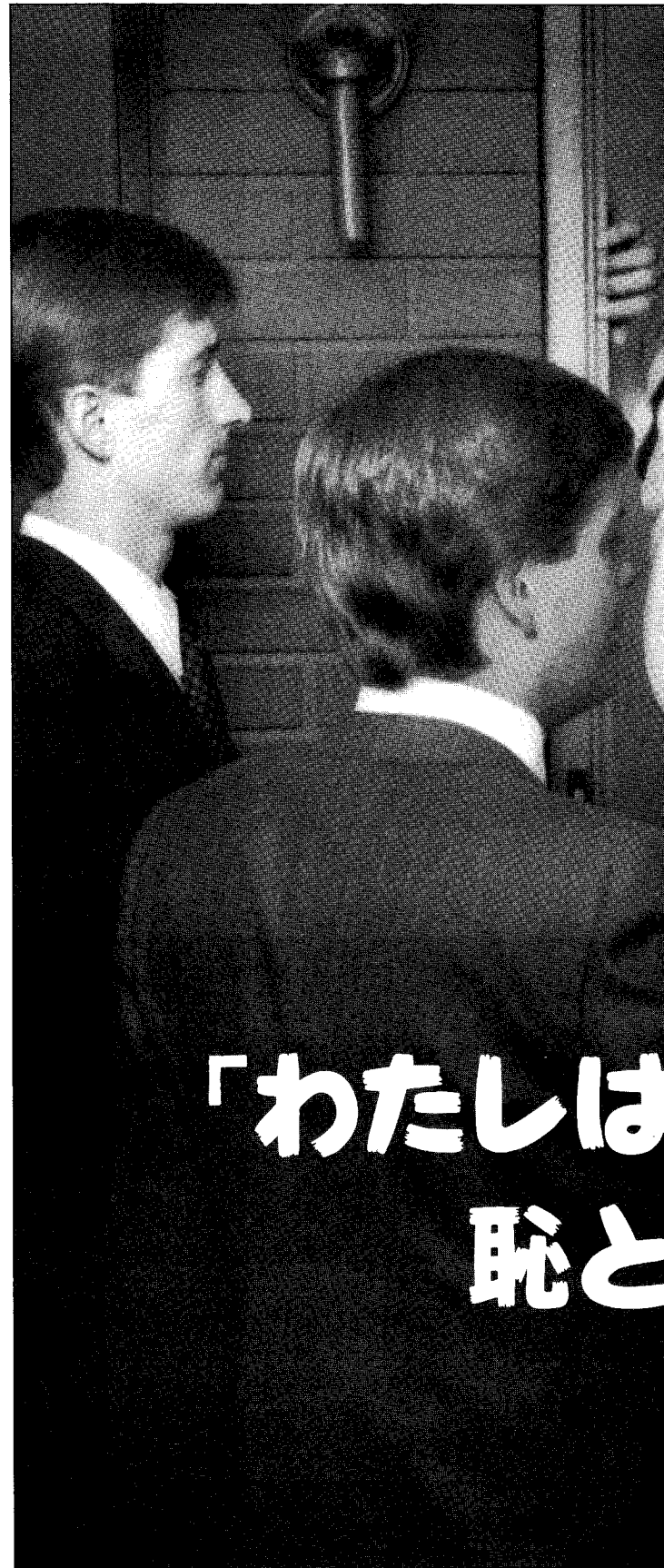
私が家族に別れを告げると間もなく、長老たちは戸別訪問を始めました。堂々とした態度で人々に語りかける彼らの姿にはただ驚くばかりでした。1時間ほどそれを続けたあとで、アボット長老が私に、「マクホーター兄弟、次の家ではあなたが最初に話してください」と言いました。

私はびっくりして「ぼくなんか、とてもできませんよ」と答えました。


するとアボット長老が、「そんなことはない、できますよ。必ずできると考えてください。このあたりに住んでいる人々の中からも、改宗者が出るかもしれないんですよ」と言いました。

それで私は、「わかりました。とにかくやってみます」と答えるしかなく、次の家のドアをノックしました。

ドアが開いて、その家の中の様子が見えたとき、私は本当に気が滅入ってしまいました。自分と同じ十代の若者たちがたくさん集り、酒に酔ってごろごろしていたのです。



「わたしは
恥と



福音を しない」

リックイー・マクホーター

私が訪問の目的を話すと、彼らは私たちを嘲り、一緒に酒を飲もうと誘いかけてくる始末でした。私はなぜ自分がそんな思いをしてまで、人々に福音を宣べ伝えなければならないのかまったくわからなくなってしまい、心の中で、「どうしてなのですか」と主に尋ねました。

あとは一軒も、自分が先に立ってノックすることはできませんでした。その夜、私は「専任」宣教師としての自分の一日の働きについて考えました。「なぜあのような気持ちを感じたのだろうか。」「どうして人々に福音について話すことができなかったのだろうか。」「わずかに2週間、人々とろくに話もできず、福音の真理を宣べ伝えることもできないような有様で、はたして2年間も専任宣教師として働くことができるのだろうか。」そして、その状態から抜け出すには、ひとつの方法しかないということに気づいたのでした。

ひざまずいて謙遜な気持ちで祈り、天父に自分の本当の願いを打ち明けると、心の中が安らかな気持ちと慰めで一杯になるのを感じました。そして静かな小さい声が聖典を調べるようにとささやきかけてきたのです。自分の聖典のページをめくっていくうちに、赤い色の印が付いたひとつの聖句が目にとまりました。それはセミナーのクラスで印を付けた聖句でした。それを読みながら、私は自分の祈りが聞き届けられたことを知りました。理解の目が開かれ、あたたかな思いが胸一杯に広がっていきました。「わたしは福音を恥としない。それは……すべて信じる者に、救を得させる神の力である。」(ローマ1:16)

この聖句がこれほど強く心に迫ってきたことは、かつてありませんでした。思わず、「救いを得させる神の力」という言葉が口をついて出てきました。そうです、福音はまさしく救いの鍵であり、恥とする必要はまったくないのです。福音なくしては、だれもこの世の生活を終えたあとに成長することはできないのです。

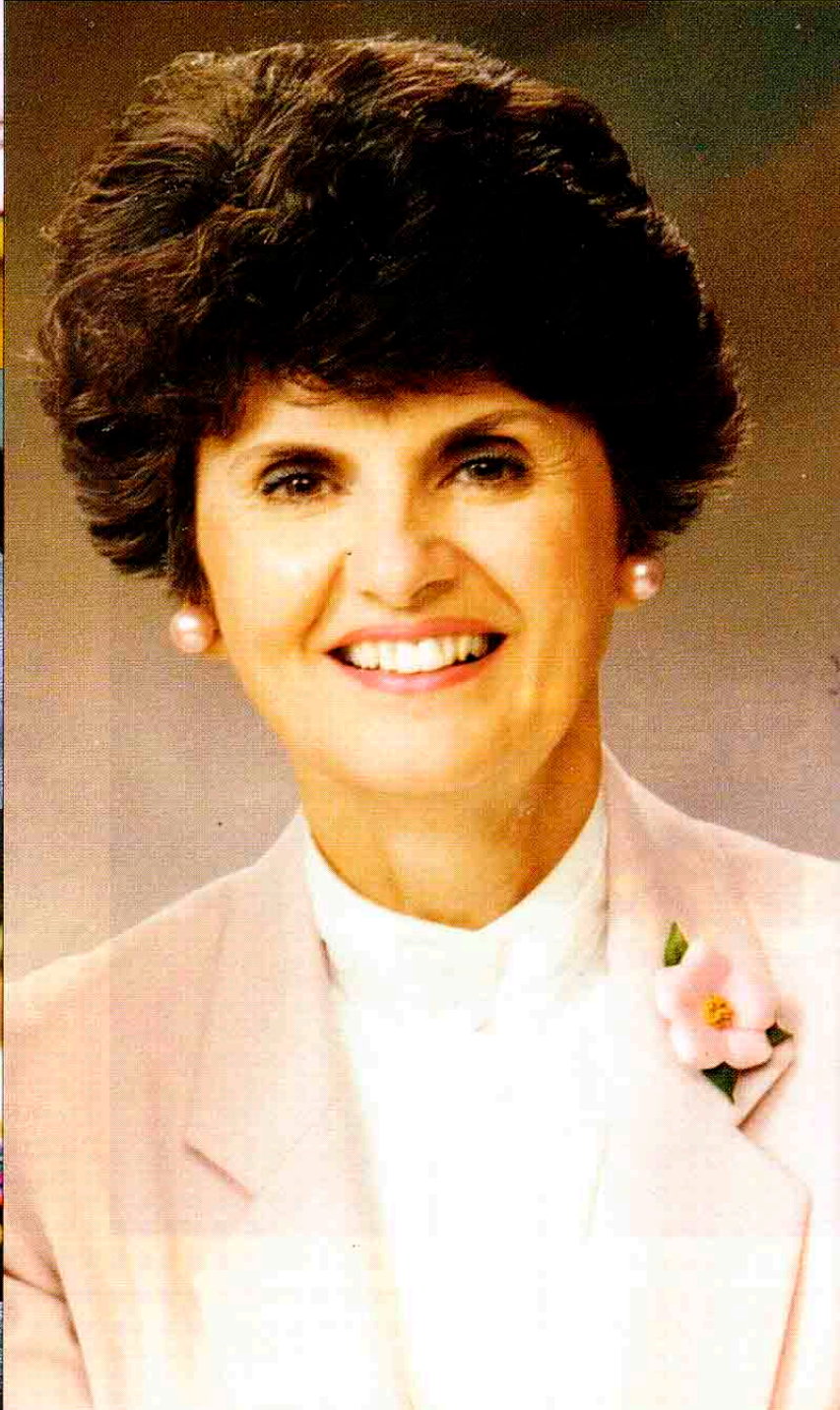
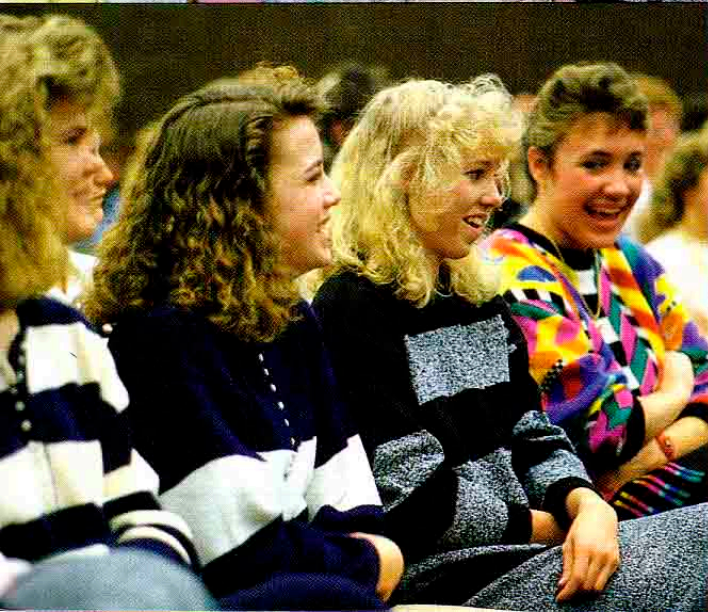
翌朝目覚めた私の心の中には、福音を人に宣べ伝えたいという強い決心と望みがみなぎっていました。

わずかな任期の間に、ふたりの長老と私が教えた人々の中から、5人の改宗者がありました。みたまのささやきに耳を傾けることによって、私たちはすばらしい力を受けることができるのです。

聖霊がローマ書のあの重要な聖句を示してくれたときの気持ちは、はっきりと心の中に残っています。そして、今でも人々に福音を分かち合うたびに、静かな小さい声が、私の耳もとに「救いを得させる神の力」「救いを得させる神の力」とささやいてくれるのです。□



中央若い女性会長
アーデス・G・カップ
姉妹に聞く



あなたには捧げるべきものが たくさんあります。

「主にもっとよく仕えることができるように、若い女性たちは福音の標準に従った生活をする必要があります。」中央若い女性会長のアーデス・G・カップ姉妹は、特別インタビューに答えてこう語っています。

自分の過去を例にあげながら、カップ姉妹はこう話してくれました。「私は、カナダのアルバータ州にある農業を営む小さな集落で育ちましたが、全世界に広がる教会で若い女性のために奉仕するよう召される日が来るなどとは夢にも思いませんでした。ただ、主を心から愛しており、全力を尽くして主に仕えたい、と願っていただけでした。私が召されたのと同じように、主は、主の教会に仕えるよう、若い女性のだれをも召すことができになるのです。」

姉妹は、旅をし、たくさん若い女性に会ってきました。そしてこう語ります。「彼女たちが、証を強めているのを見て、非常に感銘を受けました。自分たちの目的、進む方向に対してさらに意識を高めています。彼女たちは、教会員としていかに孤立しようとも、自分は大きく、重要な組織の一員であるという思いを強めています。」

若い女性一人一人と個人的に話す機会があったならば、姉妹はどのような言葉をかけるでしょうか。

「まず、一人一人の少女を抱きしめ、私が彼女たちを愛している、と知ってもらいたと思います。そして、彼女たちがどこの出身であろうと、みんな、この世に対して善い影響を及ぼせるということを理解してほしいと思います。南米やヨーロッパ、日本、その他どのような地域の人でもです。彼女たちは、家族の中で、あるいは学校の中で、あるいは村や町の中でたったひとりの末日聖徒かも知れません。また、人は自分のことなど気にかけていないかと思っているかも知れません。しかし、人はとても気にしているのです。もし、若い女性の信条を守っているならば、彼女たちは周りの人々に対してすばらしい模範となることができます。」

聖書の中に出てくる、パン5つと魚2ひきの入った籠かごを持っていた少年のことを覚えているでしょうか。(ヨハネ

6：3-13) 救い主の言葉を聞こうと5千人の人々が集まったときの事です。主は、人々のために何か食べ物はないかと聞かれました。弟子のひとり、アンデレがこの少年がパンと魚を持っていると話しました。救い主は、そのわずかな食べ物を取り、祝福して人々に分け与えられたのです。そこにいたすべての人々が満腹しただけではなく、たくさん余りができました。

その少年は、救い主が自分の持っているパンと魚を差し出すように言われたとき、どう思ったことでしょうか。私たちなら多分そう思うであろうように、彼も『何でそんなことができるんだろう。僕の持っているのは少ししかないのに』と考えたでしょうか。しかしその捧げ物は、主の祝福によって何千人もの人々に行き渡ったのです。

もし、教会の若い女性一人一人が義しい模範を主に捧げるなら、主はそれを受け入れられ、私たちが思いもかけなかった方法でお使いになることでしょうか。

私は、若い女性一人一人に、絶えず祈り、聖典を学び、教会に活発に集い、主と交わした誓約を守ることを忘れてないでいただきたいと願っています。そうすれば、あの小さな男子の捧げ物のように、主が、他の人々の生活を祝福しようとされるとき、役立つ備えができていくことになるのです。彼女たちはビーハイブのクラスのアドバイザーに召されるかも知れません。あるいは専任宣教師として仕えるように、あるいは私のように、教会の若い女性すべてに奉仕するよう召されるかも知れません。

私は、かつてエズラ・タフト・ベンソン大管長の言われた、次の言葉を確信しています。『自分の生活を神に捧げる男女は、自分の能力だけではとても及ばないたくさんものを人生から得るであろう。神はこのように人々の喜びを増し、視野を広げ、理解をきくくし、体力を増し、霊を高揚させ、恵みを加え、機会を増し、心に慰めを与え、友を招き寄せ、平和をもたらしたもう。』(『イエス・キリストー待ち望んだ賜』、「聖徒の道」1977年4月号) □

